

職業に就いて、何れも公正なる念覺を以て見なければならぬ事を説いたが
列擧した八項目は實に大丈夫の心情とすべき處であつて、公明なる思念と
正大なる覺悟は、殊に方今の社會に於いて必要とする處である。此の公明
正大は最も安樂の法であるから孔子は

『内に省みて疚しからずんば夫れ何をか憂ひ何をか懼れむ』

と云うて、心に疚しき事なき念覺公正の人は何等の憂ひも何等の懼れも無
き事を示し、無憂無懼の境界發しては乃ち顔回の所謂

『舜何人ぞや、予何人ぞや』

の大見識となり、轉じては莊子の所謂

『我を牛と呼ばば是を牛となし我を馬と呼ばば是を馬となす』

懼れなき
の精神

の解脱的的人生觀となり 俗世の毀譽褒貶に超越し、而かも其の自適するや

孔子の所謂

『人知らずして慍ほらす亦た君子ならずや』

と我は我の天地に住して無碍自在「天を怨み人を尤めず」して自ら自己
の道を進んで悔ゆる事なく、天地と我と同根一體の信念を以て無我の日常
生活を顯現するに至るのである、古聖先賢の人生觀豈に他あらんや、只だ
右の如き公正なる念覺を以て生涯を盡した迄である、佛蘭西の巴里に一人
の哲學者があつた、何處の國でも、學者に貧乏は附者と見えて此の哲學者
も甚だ貧乏である、屋根裏の生活、日本でいへば九尺二間の長屋住居をし
てゐた、或る年の新年に眼を覺して見ると世間ではやれ贈物よ年賀よと新

屋根裏の
哲學者

年を祝うてゐるが、此貧乏哲學者には一向それが嬉しくない、牛肉は無し砂糖漬の壺は空虚である、堅くなつたパン片の皮を引裂いて嚙ちりながら遙かに巴里市街の薨を見下して市民を祝福したり、贈り物の遣り取りに胸を痛めて居る隣家の金持を憐んだり、いろんな思ひに耽つてゐたが、さすがに孤獨の寂しさに、彼の胸は夕暮の雲のやうに鬱陶しくなつて居る所へ正午頃に尋ねて來たのが、一人の少女、それは此の學者が二年前に、ある人込の中で押倒されて居るのを救つて遣つた少女で、其恩義を忘れずに新年の挨拶を述べに來て、心ばかりの贈り物とて自分で植えて育てた蘭の鉢を持つて來たのであつた。

思ひ設けぬ此の贈物に、哲學者の胸の曇は霽れて黄昏の暮色から曙の

少女の訪問

色と變つた、少女を座に着かせて、だん／＼と話をして居る内に打解けて來て、やがて、少女の身上ばなしが始まつた。

少女は貧しい家に生れて、難儀な暮を爲て居る、男女二人の兄弟と共に久しい以前に孤兒となり、今老たる祖母と共に、少女はボール紙張の内職を手傳ひ、兄は活版屋へ見習に行つて居る、それで、どうなり斯うなり生活に充て、居るもの、時々不景氣で仕事が無くなると、着る物は着られなくなる、食料は缺乏をする家賃は拂へなくなる、油が高いのに早く立つそれさへ苦しいのに、おまけに冬になれば、ストーブが役に經たないので寒くて／＼堪え切れぬ、今は土の焔爐一つで、それが竈にもなれば、暖爐にもなるといふ有様、貧しい一家の辛い生活を泌々と聞かされた。

少女の身の上

此の話を聞いて居る間に、哲學者は疝癪も薄らぐやうに覺えて、話のうち「ごうかして、すこしなりとも一家の者を喜ばせて遣りたい」といふ計畫を立て、少女が歸ると直ぐ一つしかない、自分の古ストーブを修繕させ、少ばかりの備の薪を残らず、それに詰め込んで、其夜、少女の宅を尋ねると、皆外出してゐなかつた、哲學者は早速ストーブを据付け火を焚けると、心持好く唸つて火が燃える、小いランプに石油を入れて點し、そして待つて居ると、少女や兄も祖母も小い子供も歸て來て此の不意の來客と不意の贈物に、驚くやら喜ぶやら、子供がストーブの蓋を取れば、焼立ての栗が出て來る、棚にはサイダーが置いてある、少ばかりの肉の料理物や焼立てのパン、それを哲學者が持つて來て居たのを一同に進める、貧しい

哲學者の贈物

二種の氣分

一家の人達は、彼の厚意の贈物を如何に嬉しく受けたであらうか、喜んで食べ、笑ひさゝめいて語り、一家は忽ち春の花園と化した。
 やがて、若い哲學者は、心の底から樂しく嬉しく晩くまで語つて、欣々として歸つて來ると、隣の金持の奥さんが馬車に乗つて我家へ着けさせて丁度夜會から歸つて來た所だつた、さも疲びれ切つた様子で

「やれ〜辛と濟んだ」と言ふ聲が聞えた。
 哲學者は少女の家を去る時に

「残り惜い」と云つて別れたのであつた。

これは有名な佛蘭西の小説家の書いた一小話であるが、是れこそ品性の修養あるもの、生活の幸福な所以を教へた善い話である、金銀ダイヤモンド

で飾つた貴婦人の夜會は、表向きは立派に見えても、其處には虚榮や虚飾ばかりで肝腎の公明正大な念覺が缺けて居るから愉快でない、眩しいやうな一生の生活も「あゝやれ、辛と濟んだのか」の苦しさで送らねばならぬ、然るに誠あり、愛あり、慈悲ある公正な生活は愉快ではあるまいか、佛教は諸君の人格を變換する、新しい生命を與へる、佛教信仰の生活、そこに、よろこびがある、笑がある、歌がある、冷たい狭い九尺二間の長屋も春の花園であつて早や今日も暮れたのかと、残り惜しいほど愉快な月日が送られる、而して念覺をして公明正大ならしむるのである、若し此の公正なる念覺を以て世を渡るに非ざれば何事をしても「あゝ辛つと濟んだ」と云ふ溜息を發せねばならぬやうな生活となつて了ふであらう。

残り惜しい生活

伯夷叔齊

平重盛

許由

併し乍ら公正なる念覺を以て世を渡り一切の俗的物欲から超越すると云うても、所謂枯本死灰の徒となつて實際生活と没交渉になり、倫理道德と不關焉になる事は避けねばならぬ、伯夷叔齊は古の賢人であつた、賢人ではあつたけれ共、首陽山中の隱者となりて蕨を食つて居た如きは感服すべきでは無い、平重盛の如きも公正なる君子であつたけれ共、此の世を厭ひて死を熊野權現に祈つて天死した點は決して賞讃すべきでは無い、吾等は自己の修習したる公正なる念覺を實生活の上に應用せねばならぬ、支那の許由は賢者と稱せられ、堯が之に天下を譲らんとするに至つたが、許由此事を聞いて「ア、俗界の天下何爲るものぞ、缺々たる帝位吾に於て何かあらん、之を聞くだに我が耳汚れたり」とて潁川の水に臨み耳を洗つたと

念覺の公正

云ふ、或人、この許由が耳を洗ふ圖を持つていつて、水戸黄門光圀卿に賛を乞うた、所が光圀卿立ちどころに筆を呵して

耳を洗ふ心の水は清けれど

流れは汲まじ世を救ふ身は

と書付けられたところである、許由は賢人と稱せられるが、その心操は活きた社會とは全く没交渉で、所謂林泉の下に處して、廊廟的の經綸を思はぬものである、光圀は道に名君と歌はれた人、能く所謂軒冕の中に居て山林的の氣味を有て居られたのである、吾等は計由の如く超然として俗世より高踏するの度量が無ければならぬれ共、更に其超出高踏の心事を翻して俗世の爲に徹底せる善意を持ちて活動するの思念と覺悟とを有せねばならぬ。

流は汲まじ

公正より善意へ

第三章 善意の徹底

一 善意とは何か

或る處に非常に寢坊の寢小便小僧があつた、毎晩々々寢ぼけては何やらムニヤ〜寢言をいふ、何か夢でも見て居るのであらう、處が「夢さめて見れば恥かし寢小便」で、毎夜屹度寢小便をやる、此の小僧の寢室は丁度馬小屋の二階になつて居たのであるが、寢小便をやる度に二階からポチャ〜と馬小屋へ落ちる。馬先生こそ堪らない、ヒ、ン〜と不平らしく嘶くけれども小僧は一向おかまひなし、平氣の平左衛門で居るので、馬

寢小便小僧

善意の徹底

こそ實に良い面の皮。

主人も色々心配して、醫者にかけても見たが奈何しても止まない、注意するやうに意見をして馬の耳に念佛で一向きゝめが無い、或る晩の事主人が何か用事があつて永起をして居ると、馬小屋の方に當りて又もポチヤ／＼と小便の雨滴れ、主人も腹を立て、仕舞つて「明日の晩から馬小屋の中へ寝させてやらう」と決心した。

其の翌晩は馬小屋の中へ寝させたが、小僧は相も變らず夢を見て、夫れから寢言をいうて、次に寢小便をして眼が覺めた、フト傍を見ると馬小屋の中とて馬が居る、小僧周章で、

馬が二階へ上つた

「叱！叱！馬の奴めが乃公の二階へ上つて來やがつた」

我身を
知人の
痛を
知れ

と云うたといふ滑稽な話がある、人は何事に就いても自分中心にのみ考へたがる者である、善い事にせよ悪い事にせよ、總べて自己を中心とし、自己に都合のよい様にのみ解釋しやうとする、二階に寝つけた小僧は「自分の寝る處は毎時も二階だ、そして自分の寝る二階では自分が主人公だ」と考へて居る、だから馬小屋の中に寝ても「二階だ」と考へ、馬小屋に居候をしても「自分の二階だから自分が其處の主人公だ」と我田引水の解釋をした處が此の寢小便小僧ばかりでなく、世の中の多くの人は皆な自己中心の勝手の解釋ばかりして、他の人の立場になつて問題を解釋し様とは考へない、若し他の人の立場になり、他の人の都合を考へて解釋して見れば、何かなる人にも相當の理由があり、相應の意見があるものである、されば吾

等は善意を以て暫らく他の人を中心にして考慮を廻らすの必要がある。然らば善意とは何ぞや、英語の Good Will である、是れを詳しく説明せんには善とは果して如何なるものを指すのか、善悪の標準は何か、と云ふ問題を先づ解決して懸らねばならない、されど今茲には左る面倒なる事は暫く措いて、單に親切寛容慈愛を以て佗に接する人の意志と定義して置く、凡そ人の心は不思議なもので「彼奴は忌やな奴ぢや」と考へて見れば彼れの舉手投足悉く氣に入らず、遂には「坊主悪くけりや袈裟までも」悪きに至り、彼れが周囲の一切を化して憎惡の境たらしむる、是に反して好の眼を以て彼れを見る、痘痕も尚ほ笑凹たるは必ずしも若き相思の男女間のみに限られたる諺語では無い、世豈に極善と極惡とのみならんや、色眼

鏡を去つて虚心淡懷、靜に人心の秘奥を觀察すれば、善人時に少瑕なきを保せず、惡人或は寸善能く掬するに足るもの無しとも限らぬ、佛者は「一切衆生、悉有佛性」というたが、佛性の眼を以て見れば萬人悉く佛性を有して居る、彼の佛性を認めて是を開發助長せしむる所に我の善意は躍如として活現する、或は彼の「一佛成道すれば、大地有情等しく成道す」の語に見るも、我の心月を蔽へる猜疑、嫉妬、罵詈、讒謗、憎惡の黒雲を拂ひ去り、光風霽月の心懷を以て彼の天地有情に對せば、天地有情亦我等しく麗々照々の光を發つことを知るべきではないか、人一度罪を犯して他人に對す、他人多く警吏に見えずんば便ち探偵と見ゆると云ふ「げに怪しきものは心なりけり」で、此世を化して天國たらしむると、悲境たらしむ

るとは、是れを看る我が目——心の善なりや、悪なりやに據つて別る、善意の人の眼に映じたる人生は天國である、此世我に取りて天國たるのみならず、彼の爲にも天國である、ピーコンス・フキールドの語を借つて云は「信者の爲には至る處に天國がある」、善意を以て自己處世の信となす我の到らん處、我の住まん處、悉く天國と成つて、心常に平安なるを得るではないか、此の平安なる心を以て彼に對す、對せられたる人亦自ら一種の平安を感じて、彼も春風胎蕩、和樂の世界に逍遙するが如きの氣分になり得るであらう、右は即ち善意の解釋にして亦その功德である。

吾等は善意を以て親切寛容慈愛を以て他人に接する人の意志なりとしたされば即ち他人と交るや、悪しき意を以てせず、勉めて他の感情を害せざ

らんとするは善意の一展開である、併し乍ら徒らに他の感情を害せん事のみを恐れて、佗の意を迎ふるに腐心するが如きは意氣地なきの行動である阿諛追従を以て善意と混同してはならない、凡そ善意の要は、暫らく自分を離れて、他人の立場になり、他人を中心として解釋して見るにある、彼の親切とか、寛容とか、慈愛とかは、他の人の立場になりて、自分を離れて考へて見た時に、初めて現はれて來る處の心情である、彼の寢小便小僧の如く、自己中心にのみ考へて、他を眼中におかないやうな我田引水は一種の Egoism として排斥すべきものである。

二 信に據りて

他に對する善意は世を渡る上に必要缺く可からざるものであるが、「言ふことは易く行ふことは難し」で、眞實善意を以て他人に對せねばならぬといふことは、現窟は解つて居ても實際になると、却々出來がたいものである、凡そ處世上萬般の事象は、實際に是を行はんには、心の底より湧發して來なければならぬものであるが、假りに實行し得たとしても、心底よりの湧發でないと其の實行に力がない、殊に無條件で他の人のために盡すとか、善意を以て他に對するとか云うやうな事になると、附焼及や理窟では到底駄目である。

畏くも明治天皇には教育勅語の中に「朋友相信」と宣せられたが、眞に相信じて居なければ、善意の實現は望まれない。信は道元、功德の母」

力の缺乏

朋友相信
の勅詔

此の相信するの信は誠に一切の正道の根元、諸般の功德の母であるから善意を持つことも此の信を根底として夫れより湧發せねばならぬ。「朋友相信」の信は、自分が「朋友を信する」と云ふので、是れは他信であるが此の他信は根底において自ら「斯うなけねばならぬ」と云ふ自信を抱いて居なければならぬ、即ち他信は自信を根底として生ずるのである。

偕て善意の根底たるべき信もまた他人を眞に信すると云ふ他信が無ければならず、自分は彼の人に斯くせざるを得ぬと云ふ自信がなければならぬので、完全なる善意は信に據りて初めて實現するものである。

殊に一切の宗教は、信の一字を以て生命となすことは佛教を初めキリスト教、その他何れの宗教に於ても皆然りである、然るに信心といふ二字に

信心の二
字

すると其意味は採り様に依つて自ら趣を異にするのである。即ち他力門の宗意を見れば、信ずる心といふ読みやうで、所謂攝取不捨の彌陀の願力を信じて疑はぬ心といふ意味になるであらう、次に自力門の宗意、殊に禪の宗意より見れば心を信ずるといふ読みやうで、即ち人々本具の自性に清浄心のあることを自ら信得するのである、最も此の自信には程度があつてたい人に自性清浄心あることを信じて、即心是佛を疑はないといふ程度と更に進んで悟道の境に入つて、見心、見性する程度も信心といふことが出来る、彼の三祖大師の信心銘に於ける信心の二字の如きは、全く後の意味である、それでかくの如く文字の理窟から云へば、信仰心といふ文字は自ら他力的意味に近き言葉のやうに思はれて、即ち自己以外に偉大なる佛

本具の自性清浄心

宗教的意識の中樞

陀の力を仰ぎて、それに信賴するといふやうな文字で、悟道明心を指していふには穩當でないやうに思ふ、最もこれは文字より見ての解釋であるけれども、ともかくさういふやうに理窟がつくとして見れば、信仰心といふは他力門に應用すべき文字で、自力門には信心といふが妥當のやうに思はれる、然しこれはあまり文字に捕へられ過ぎた解釋であらう、故に抽象的に云へば、信仰心といふも信心と云ふも信者が一般に有する宗教的意識の中樞の心象を云うた者である。

然るに佛教では信といふ字を、如何なる義理に見て居るかといふに、清浄を性とすといふ、然らば信心とは清浄の心が佛教では所謂宗教心である、而して、その清浄心とは如何なる心であるかと云ふに我を捨てた

る心の事である、即ち無我の心である、淨土門ならば彌陀の大悲に打ちまかせて、絶對他力に安住して我を捨てたる心である、禪門ならば絶對の理致に合一して、心境不二、物我一如の三昧を得たる身心共に超越の妙境をいふ。この無我は佛敎の原則にして、眞如の實相である、神明及び佛陀はこれを以て妙體となす、故に吾等が清淨無我の身心を捧ぐる時は、自ら佛神の妙體と妙合一致して不思議の靈感に接觸する、これを感應道交と云ふ彼の「菩薩清涼の月、畢竟空に遊ぶ、衆生心水淨ければ、菩提の影中に現す」といふはこの意味である。

感應道交

然ればその清淨無我の信心は如何にして、獲得するかといふに、これは元より吾等が本來有する自性清淨心の漏泄であるから、他に從つて求め得

自淨其意
是諸佛敎

べきものではない、見佛問法を縁として、内に自ら啓發する處の者である抑も吾等の本性を呼んで、自性清淨心といふ、其の心性の清淨無垢なる事は、超日三昧經に「世に處して虚空の如く、蓮華の水に著かざる如きよりも、心の清淨なる事は、彼に超ゆる」と申してある、この謂を佛心とも如来藏ともいふ、佛敎は敎へたこの自性清淨の佛心を引出すに過ぎざれば、七佛通戒偈にも「自ら其の意を淨くする、是れ諸佛の敎なり」と云ふてあるでは無いか。

然るに衆生は佛と等しく、此の清淨の心性を有しながら、煩惱のために掩蔽せられて、その靈光を發揮すること能はず、困患の巻に彷徨して、憂惱の苦みに漂ひつゝあるのである、故に法力薰習の力を以て、その煩惱の

無理な文や祈願

隠閉を拂掃し、清淨離垢の心光を開發するを信心といふのである。

佛神に對して徒らに無理の希願をなし、我意の満足を成就せむとする如きことを以て信心とする者は信心の意義を誤れるものである、元より佛神の大悲は衆生に満足を施すにある故に、それもまた信心の一分にして、利益も在るべきではあらうけれ共、是れ實に無理な注文である、吾等は此のやうな無理な注文を止めて、眞實心底より無碍の淨心を發起し、信心を以て世に活動せねばならぬ、若しかゝる信心を湧出する事が出来たならば、他人に對しても自ら善意を以て交際する事も出来るであらう、實に信は善意の根底であるから、善意を以て世に處し、人生を向上せしめんには先づ第一着に信心を獲得せねばならぬ。

信心を得せよ

三 圓滿なる人格

善意を以て人に對すると云ふことは宗教的に云へば信心が根底であるが倫理的に云へば圓滿なる人格が大切である、凡そ信心と圓滿なる人格とは相關したもの、信心があると圓滿なる人格が得られ、圓滿なる人格であるとき自ら信心が得らるゝのである、彼の信心を得た人の行動を見るのに何となしに滑かで角がない、落ち付があつて粗暴でない、穩健であつて極端でない、而して此のやうな行動は、直に人格の圓滿なる事を證明するものである。

極端なる可からず

偕て吾等が圓滿なる人格を得やうと思つたならば、不斷の修養に努めね

善意の徹底

ばならない。

忠實におほし立てなば宿毎に

はなも咲くべし實も結ぶべし (烏丸光廣)

で忠實に修養する時には吾等の人格は圓滿なる花も開くべく實も結ぶであらう、然るに多くの人は忠實に修養することを忘れて、彼の宗教的修養に於ても、誤れる見解を有し、不忠實、不眞面目なる行爲に出づるものが少なくない、我田引水の要求を以て佛神に對する如きは、往々下層社會に見る處であるが、斯かる個人主義的要求は安心立命を目的とする信心の意味とは全く違ふ。

世間の人、稍もすれば、自己の我欲を希願して、満足せざる時は、佛神

忠實眞面目に

佛神の利益

を恨むものあれど、それは理不盡至極の了見である「三界は唯心の所造なるが故に、心淨ければ國土も淨し」といふ、この故に心清淨にして、人格の圓滿を得れば自ら災殃も變じて禎祿を得る、故に佛心を得て人格を圓滿ならしめんとせば、心の清淨を得れば自ら幸福を招くに至る、これを佛神の利益といふ。

古人の句に「立ち給ふ佛は人の案心子哉」とあるが、全體吾等が崇拜する佛神の客體は皆吾人が心性の影法師である、故に心の清淨なるだけそれだけ、其人の前には神明佛陀は威徳を増加するものである、是れに反して汚濁せる心の前には、神明佛陀は遂に現れぬ、これが世に所謂無信仰の人である、これ即ち自性の心徳が現はれぬのである、然しながらその汚濁せ

無信仰の人

善意の徹底

る妄念の奥に清淨の心性は必ず秘在する故に、その汚濁を離るゝに従ひ
妙明の心源に靈光を發射し來るものである、この靈光に佛もあるし神も在
る、月影は現に水中に宿れども、水性濁亂すれば、影明らかならざるも、
澄靜を得るに従つて、影團明かなるが如くである。

上 人格の向

人はこの心性の清き光明に觸れて人格を向上し、人生を善化せしむる
ものである、故に信心は老人の仕事の如く心得て、これを疎外し無視して
青年には要なきもの、如く心得るは甚だしき誤である。若き人ほど一日
も夙く佛の教に歸仰して信心を獲得し、無垢の心靈に接するが、人生に於
ける無上の幸福にして、宗教の人生に必要な所以も、またこゝに於いて
意義を明かにするのである、此の無垢に接する事が出来れば、其の人の人
格は自ら圓滿になるのである。

汝若し財
産なくば
汝の徳行
を資本と
せよ

若し人格の圓滿が得られたならば、其の人の他人に對する行爲、亦從つ
て圓滑になつて、即ち善意の人と云ふことが出来るのである、然るに多く
の人は、此の圓滑なる行動を以て「意義なき卑劣なる八方美人主義では無
いか」と反對するの傾向がある、吾等は茲に八方美人説を吟味せねばなら
ぬ、若し卑屈なる考のみを以つて空しく佗に媚ぶるを事とするが如きを入
方美人主義と稱するならば極力是を排斥せざるを得ぬ、然し乍ら眞實吾
等の心に善意なるものありて、奈何なる人にも親切を盡す事を得ば、是れ
善き意味の八方美人主義には非ざるか、只だ己に都合善き時——處——人
にのみ親切を盡して是に反する時——處——人には惡意を以て對し、以て

善意の徹底

二〇九

入つ當り主義

「我に氣骨あり、我は八方美人に非ず」と云ふ者あらば、誰か彼を以て善良なる人となさんや、勿論、我等は自己存在の意義として抵抗がなくてはならぬ、天上天下、唯我獨尊、の大自然を要する、されど此の自覺は八つ當り主義では無い、自覺せる抵抗力を以て、自己存在の意義を遂行して行くの上にも、他の感情を害せざらん事に勤むるのは人間の美德である、此美德を表現するの八方美人主義、争でか獨立自尊の美風と矛盾撞着するものぞ、孔子曰ふ「己の欲せざる處、是を他人に施すこと勿れ」と。

我彼の善意を欲す、彼の我より善意を求むるや當然のみ、私の好む所を以て、彼に與へ、私の欲する處を以て彼に施す、茲に眞個の八方美人主義を實現するであらう、「八方美人主義の普及は社會文華の程度を示す」と云

成功者に對して

へる西人の言頗る肯當せるを想はざるを得ない、此の八方美人主義は實に圓滿なる人格を有する人にして初めて能し得る處である、吾等は斯かる人格を得んには大なる修養を要する。

善意を根底とせる八方美人主義は大切な心情である、併し乍ら人間に嫉妬心ある處、兎角成功者に對して此の心情は起らない。

悪口を云へど成りたや金の番

で他の金満家に對して「彼は金の番人ぢや」と悪口はすれども、自分もやはり其の金の番人になつて見たい、否な、金の番人に成つて見たければこそ、他の金の番人を悪口するのである、是れ人間の嫉妬心である。

善き仲も此のごろ悪しくなりにけり

隣りに藏の建ちてよりのち

浅間しきは嫉妬の妄炎ではないか、試に路上、人の對話するを聞け

甲「君、此の頃X君はどん／＼成功するぢや無いか」

乙「併し君、Xは狡猾な奴だから、世人を瞞着して居るのさ……………」

まだ彼なごが……………」

乙は必ず鼻上に小麩を寄せて直に甲のX成功説を反駁するであらう。

A「雪子さんは此の頃大變な金満家へ嫁ぎましたのヨ」

B「アラッ、學校に居た頃は落第ばかりして居たあの雪子さんが?」

B嬢の口を突いて出づるは同窓の幸運を祝ふの言葉に非ずして、校友の弱

點を摘發する輕賤である、「若し他人の成功を耳にして悪意を起さるる場合

他人の噂

某撰手の
悪行

ありとせば、彼と我と全たく没交渉なること埃及人と日本人との如きか、
親近なること兄と弟との如きか、我の彼を恐るゝこと奴隸の専制君主に
於けるが如きか、の三者を出でない」と云へる諷刺は最も當れるに近い、
彼の幸運を祝ぐこと我の幸運の如く、彼の成功を悦ぶこと我の成功の如き
善意は、今の世、寥々として曉天の星よりも稀である、某の競技會に於い
て、自ら優勝の月桂冠を獲んが爲に、前夜私に對手選手を襲うて負傷せし
め、翌日漸く第一等の優勝を克ち得たりし某撰手の如きは、競技の成功者
ではあつたらうが竟に人間としての劣敗者であつたと云はなければならぬ
成功者に對して善意を持つことは最も無圖かしくして且つ大切なこと、云
はねばならない。

成功者は得意の人で、不具者は失意の人である、されば不具者に對しては一層同情のある善意を持たねばならない、抑も此の世に生來の不具者の出で來りしは吾等の知り得ざる自然的の原因もあらう、或は父母の罪惡の結果なる者もあらう、何れにしても生來の不具者は自己の不具なる事に關して、何等の責任も持つて居ない、是等の生來の不具者に對して、善意同情の眼をそぐと云ふことは、社會的生活をなせる人間としては當然の義務である、然るに世には此の當然の義務さへ果し得ない者も尠くはない是れ實に圓滿なる人格が無いためではあるまいか。

吾等は止みなき修養を積み、自己の人格をして極めて圓滿なるものたらしめねばならない。

同情の眼を注げ

四 不具者と失策者

吾等が善意を以て他に對すると云ふ圓滿なる人格は、特に不具者や、過失者や、失敗者に對せし時、一層深厚でなくてはならぬ、凡そ不具者とか過失者とか、失敗者とか云ふものは、人生に於いて最も不幸なる人々である、不幸なる人ほど他人の同情を欲するものはないので

落ちぶれて袖に涙のかゝる時

人の心の奥ぞしらるゝ

と古人も云うたやうに、不幸な場合に遭遇せる人に盡せし同情は、他の得意の人に盡せる同情よりは、幾數倍の有難さを以て迎へらるゝものである

善意の徹底

不幸の人

長者の一燈

不具者に對して

憐りの道

二一六

勿論、吾等の能力には制限があるから、不幸の人、失意の人に對して物質上の援助を與へると云う事は出来ない事もあらう、併し乍ら「貧の一燈、長者の萬燈」で、分相應の援助をするといふ事は、人間の美德である。若し夫れも出来ないとならば、切めては善意の眼を以て彼等に接せねばならないのである。

殊に彼の生れ落つるや不幸にも不具なりし人々に對しては、彼等の不具は、彼等の自由意志の結果に非ざるを以て、本人の社會に對して耻しく思ふの理由は毫もない、況んや人間の本務たる活動のため、不幸にして不具となりたりとせば、彼等の不具は寧ろ名譽の表象ではあるまるか、然るに實際は是に反して不具者は非常に己を耻ぢて人前に出づるを憚る、殊に婦

女の不具者

人に在りては一層甚だしく、人並に結婚する能はざるを悲觀して遂に自殺を企つる者すらある、されど吾等は是等の不具者の心狭きを責むる事は出来ない、开は彼等をして自己の不具を心耻かしく思はしむるは、社會の彼等に對する態度の頗る慘酷なるが爲なるを知るからである。若し一般教育の進歩にして不具の自由意志に依るものならざるを知悉するに至らば、一般人の慘酷な態度は一變するであらう、さらでだに穴にも入り度き心地は愈々彼等をして陰鬱に傾かしめたるを、街上にて目撃する片足の人、片手の人、脊虫、跛者、盲人など、衆人は必ずしも彼等を嘲笑するのではないが、唯だ好奇心の爲に、或は同情の念を有つて彼を凝視する、然れども衆人は斯の如くするのは無意識の中に耻辱を與へつゝあるのだとは自ら氣付

善意の徹底

二一七

不具を忘れしめよ

かない、總て不具者に對しては、彼等をして不具者たることを自ら忘れしめねばならぬ、「君は奈何にして其様な不具には成りしぞ」と問ふは親切に似て却つて然らず、不具者自身の方より「予は斯くの如くして不具となれり」と説明せる時、初めて「君は其の如き不具の點ありしか、予は今に於る迄氣付かざりき、況んや一般人は知り居らざるべし」と云ひてこそ不具者に對する善意を現し得たものと云へるであらう、即ち吾等が不具者に接したる時には、彼等をして自己の不具を忘れしむると云ふ考を起さねばならない。

失策者に對して

不具は一生涯に通じての不運者なれば常に善意を以て彼等に對せねばならぬが、一時の失策者に對しても深き善意を注がねばならぬ、不具者を見

禮儀の眞精神

て珍らしがるのも、他人の失策におかしみを感じるのも、多少人間の自然性であるが、是を徒らに放馳すれば時に社會の秩序を害ふ、苟も社會の秩序を保ちて他人に耻辱を與へまじと思はれ、教育と修養の力によつて此の自然性を矯めねばならぬ、若し失策が耻辱とならざる場合の如きはおかしみを暴露して打ち笑ふの不可なきも、失策者が赤面せざるべからざる場合の如きは、笑ひを抑ふるのも彼に對しての善意であらう、女學校などにては、學生がおかしき答辯をなすと、他の學生が無遠慮に笑ふ癖があるので、學生は大膽に答辯する事も出来ねば、不審を質問することも爲し得ない者が往々あるとか、抑も禮儀の眞精神は他人に耻辱を與へざるにあるものを障子の開閉、客膳の運び方、茶の湯、生け花等の末技に心を用ひて、根本

の眞精神を失ひ、他の些細なる失策にも嘖飯して打ち笑ふ現代の婦人等は無禮極つては居なからうか、初めて洋行した人、殊に初めて彼の地の食堂に入れる者の、往々にして時ならぬ失策を演ずることあるは珍らしくない而かも物馴れたる同伴者は臨機の行動を取りて、其の失策者をして自己の失策を意識せしめないやうに努むるといふでは無いか。

或は職業上の失敗者に對しても同様に善意が無くてはならぬ、人は誰しも自分の見込といふものがある、其の見込に随つて或る事業を起せし場合に、不時の不可抗的の出來事によりてか、或は自分の見込違ひのために其の事業が失敗したりとせよ、其の人は自分の努力を以てベストを盡したに係らず失敗したのならば、彼れに對して大なる同情を拂はねばならない

事業上の
失敗者に
對して

彼は彼た
り我は我

或は失敗の原因が企業者自身の怠惰不熱心にありとしても、其の失敗企業者に對して惡意を持つと云ふ權利は無い、怠惰不熱心に對する惡報酬は企業者自身で受けて居るのであるから——失敗といふ結果によりて其の報酬を甘受して居るのであるから、敢えて第三者が其の人を惡むと云ふ理由はない、又、權利もない、失敗者は彼である、我は只だ我の本務として、彼に同情してやれば良いので、而して無限の善意を以て彼に對すると云ふことは實に人間としての義務である。

見よ、世上には多くの不具者がある、失策者がある、失敗者がある、實に哀れなる者は彼等である、是れ等の哀れむべき可憐の人々に對して慈悲同情、大に善意を以て交際してやると云ふことは、吾等の大なる誇りでは

悟りの道
無いか、自己の心中に於いて大なる愉快な、大人らしい気分が浮ぶではないか、弱者に對して善意であるといふ事は強者に於ける大なる快樂ではあるまいか。

五 外國人

犬や猫が仲間と戯れて居る有様を見るに、彼等の間にも好き嫌ひがあるらしい、赤と三毛は親しいが、ブチと虎とは仲が悪いとか、白と三毛とは毎時も喧嘩をするが、黒とブチは毎時も一所に遊んで居ると云ふやうな事は、吾等の平常見聞する處である、是れを毛嫌ひと云ふが、人間と生れて矢鱈に毛嫌ひをするやうの事ありては、犬や猫と大差がない、吾等は大人

る度量を以て此の毛嫌ひと云ふ思想を去らねばならぬ。

處が同國人ならば毛嫌ひせぬが他國人ならば毛嫌ひするとか、或は同一人種ならば毛嫌ひせぬが異人種ならば毛嫌ひするといふことは往々にしてある事だ、獨逸のカイゼル皇帝が黃禍論といふ事を唱へたのは、政治上、經濟上の利害關係にもよるではあらうが、東洋人に對する毛嫌ひの思想も實に其の重大なる原因であつた、吾等はカイゼル皇帝の如き少量でなく、大なる襟度を以て異人種、他國人に對せねばならぬ、此の毛嫌ひの思想を去るといふことは消極的ではあるが、實に一種の善意である。

此の消極的の善意を轉じて積極的となし、異人種、外國人に對して大に同情慈愛の心を以て接すると云ふ事は文明國民として必要なる態度である

云ふまでも無く外國人に善意を盡すと云ふには、國民としての大自覺がな
くてはならぬ、即ち國民的自尊心が無かつたならば、卑窟に陥りて、大度
量の善意は生じない。

此の天地宇宙の間、國として存在して居る國は幾千あるか知れぬのであ
る、又随つて獨立の民も數に於ては幾千萬の多きに達するであらう、而し
て富國強兵、其他に於て特色を發揮して居る國は何の位あるか知れぬ、さ
れど見渡すところ、上に一天萬乗の君を戴き、下六千萬の同胞が互に一致
團結、事あれば義を見ること泰山の如く、自己の死は鴻毛の輕きに比して
共に君恩に報ゆると云ふ、殆んど理想的の國は我國を措いて他にあるであ
らうか、吾等は決して無いと斷言して憚らぬのである、吾等は此の特色を

日本國の特色

眞に自覺して「我は大日本の國民である」といふ大見識を懷き、此の大見
識の上から外國人に善意を盡さねばならぬ。

乍併、ある時代に於ては盛衰治亂の波瀾は孰れの國を問はず多少は免
るゝことの出來ぬ次第である、随つて我國にても建國以來今日に到る迄殆
んど三千年、其間中古時代の如き政治上の波瀾はあつた、源頼朝の如き征
夷大將軍、總追捕使となつたけれども、帝位を窺ふ等の如きことは絶へて
なかつた、又足利尊氏を初めとして二三の横暴漢はあつたけれども、彼等
は一方に名目丈なりとも皇族を戴き、私腹を肥した丈であつて、これ又國
體の尊嚴を疵付くる等の事はなかつたのである、要するに平和であつた、
此の三千年の歴史は炳として日星の如くであると云ふのは實に我が國の誇

三千年の歴史

りではないか。

吾等は小き池の淺瀬の風波に船を操つたと云うても、決して自慢にはならない、人あり大洋の風波逆巻く激浪怒濤に向つて小舟を操つたと云うたならば誰しも其手腕に驚くことであらう、於茲、初めて誇りとすることを得るのである、國家のこともこれと同じことではあるまいか、従前我國の誇りとするところは、或は小池に小舟を操つて居たのみではなからうか國體を世界に向つて誇ることを空しく過去にのみ求めてはならぬ、過去の光榮ありし國民は今後は更に大度量を以て外國人に對し、善意を以て交際するといふ事が必要である。

我が國家の誇り

世界の氣勢より考ふる時は、我國の如き實に微々たる東洋の一孤島に過

過渡時代

ぎなかつたのである、眼を放てば一方には支那の大陸あり、歐洲の文明國あり、米國あり、かゝる國が嚴然として控へて居たに拘はらず、従來は未だ曾つて危険な事に遭遇したことはなかつた。

然るに近來に至り文明の餘弊として、種々なる思潮界の起伏波瀾が生ずるに至つたのである、之れ狭少より擴大に遷るは世界の原則であつて止むを得ぬことである、此際歐米の新思潮の傳播を憂ふる人があつても、開は大勢の趣くところであつて、何とも仕方がない。

空氣は宇内一般共通のものである、此の共通の空氣が溢れる時に、我が國のみ新思潮に逆行するわけには行かない。

されば従前は金匱無缺の日本國として、如何なる大事に遭遇しても、未

だが曾つて國體に疵を付けたことはなかつたのであるから、今後も放任して置いても差支ないかと云ふに吾等は直ちに賛することは出来ぬ。

今日思潮界の混亂は大海の怒濤である、従來は小波小浪に小船を操つて安全を誇りとして居たのであるけれども、今後は激浪怒濤に向つて小船を浮べ、戦鬪を宣せねばならぬ時期が到來したものであらうと思ふ。

従前は内に向つて尊嚴なる國體を守つて居たのであるけれども、今後は外に向つて國威の發揮に努めねばならぬ、これ吾等の天職であつて、必ずしも武力のみに限らぬのである、國威の發揮は大に國民の自覺に俟たねばならぬ、國民たる者は大に自覺せる大國民的襟度を以て外國人に對せねばならぬ、大國民的襟度の一は實に善意である、彼の毛嫌ひの如き小なる量

外に向つ

見をすて、世界一家、四海同胞の大精神を以て、世界各國人に對せねばならないのである。

六 罪人と動物

吾等が善意を以て人に接せん事を願うても、時によると其の願に反するやうな事が往々ある、夫れは怒ると云う心があるからである、此の怒る心は自分の精神を攪亂して仕舞ふ、忿怒は他人に不快を與ふるのみならず、實に自分の平和なる精神を擾亂して仕舞ふのである、昔、或る男、其の妻の嫉妬ぶかいのを憤つて、一層の事に殺してしまはふと考へた、そこで其の殺す前は、一應釋尊の意見を聞かうと思つて釋尊の處へやつて來た、釋

善意の徹底

二二九

尊は其の男の云ふことを聞き終つた後、静に云はるゝ事に

「さて妻を殺さんとするの前に、汝の忿りの心を殺せ、汝の怨の心を殺せ、此の忿り怨みの心を殺さば汝の心の安穩を得るのみならず、我もまた歡喜する處であるぞ」

と、夫れより其の男は自己の短慮を悔ひ、嫉妬ぶかい妻に對しても、極めて善意を以て對したので、妻の嫉妬心も日一日とやはらいだと云ふ事である、平和に治るべき事が突然破裂するに至るのも、數年來の親交を一時に斷絶するが如きも、其の原因は多く忿り怨む心にある、しかのみならず忿怒の心は實に法律上の犯罪すらも敢えてするに至るのである、併し乍ら他の人が犯罪をやつて、所謂罪人となつた場合には、吾等は其の罪人に對し

て、可憐の情を以て接せねばならない。

大きな心を以て考ふれば、罪人と雖も矢張り吾等の兄弟姉妹である、吾等が吾等の兄弟姉妹の中から罪人を出したといふのは、寧ろ我等の耻辱であつて、社會の罪であるから、敢えて罪人其者のみを責むるにも當るまいと思ふ、されば不幸にして犯罪人の列に伍した者があつたならば、吾等は其の人に對して可憐の情を以て接してやらねばならぬのである。

吾等は罪人といへば直に法律上の犯罪者を豫想するのであるが、法律上の犯罪者のみが獨り罪人であらうか、世には幾多の道德上の罪人がある勿論、彼と此とは犯罪の程度に輕重はあるけれども、道德上の罪人と雖も、決して犯罪者でないと公言することは出來まい、處が翻つて考へて見

ると、吾等お互は多かれ少なかれ道徳上の犯罪をやつては居ないであらうか、前にも述べた如く失策者に對しても善意を持ちて彼等を救ひ、彼等をして失策を自覺せしめないやうにする事は大切な事であるのだから、吾等は更に進んで道徳上、法律上の犯罪者に對しても善意でなくてはならぬ凡そ善意といふ事は些々たる問題に似たるも、善意の在る無しは引いては修養の如何を現はすもので、最も注意すべき事ではあるまいか、されば吾等は如何なる場合にも、善意を離れないと云ふことが最も大切である。

古人は「罪を悪んで人を悪まず」と云つた、罪人に對しても相當の善意を以て遇せねばならぬ。

「善に對して酬ゆるに惡を以てするは禽獸の如く、善に對して酬ゆるに善を以てするは人間の如く、惡に對して酬ゆるに善を以てするは菩薩の如し」

罪人に對して

と云ふ言葉がある、親切に、慈愛に、而して犯罪者に對しても寛容であらねばならぬ、英國の女王エリザベス・フリー(1781-1845)は其の全生涯を囚人の間に投じて彼等を慰藉する事に全力を捧げた、會つて重罪犯人を收容するニューゲート監獄内の婦人監房の前に立てる時、知人あり、房内の瘦せ衰へし見るも哀れなる婦人囚徒等を指して「是等の囚人は如何なる重罪を犯して茲には來れるぞ」と問へるに對して「予は知らず、予は曾つて彼れ等に尋ねたる事なし」とて、囚人に其の罪を尋ねて耻辱を與ふるの非道なるを暗示し、更に「吾等お互は誰しも罪を持つて居る身ですから……」

誰も罪人

……」と答へたといふ、宜なる哉、女王の慈愛、親切、寛容は彼等囚徒をして母の如く懐き慕ひ、神の如く尊び敬はしめたと言ふではないか。

他人に對する善意は推して以て動物にも及ぼさねばならぬ、魚を盗める猫は、猫必ずしも悪しきに非ず、盗まるゝ如き處に置ける人間の罪ではないか、馬の主人を捨て、走り去れるは馬必ずしも悪しきに非ず、縛ぐことを打ち忘れたる人間の罪ではないか。猫は必ず爪を立つるもの、犬は必ず吠えつくもの、馬は足で蹴るもの、牛は角にて懸くるものと、初めより惡意を以て彼に對す、乃ち其の杞憂は竟に事實となりて現はるゝに至るのである、是を出入の魚屋の小僧に聞く、「甲の家は犬は屹度吠え付くならん」と考へて行くと思つて吠え付きたり、「乙の家は犬は吠えまじ」と思ひつゝ、

平氣に進むに果して吠えざりきと、昔柳生但馬守は澤庵禪師と檻内の虎を試す、但馬守鐵扇を取つて「汝吾に飛びかゝらば直に鐵扇の下に打殺さん」と睨んで檻に入れば、其の恐ろしき風貌漸くにして虎の飛びかゝるを防ぎ得たり、澤庵は乃ち「汝、虎よ、一切有情は皆佛子なり、汝も亦佛の子なるか」と、温顔を湛へて檻に入るに、猛虎も尾をたれ、首を振つて禪師の衣袂に摺りつきたりと云ふ、「仁者に敵なし」善意は能く動物の心裡にも通徹するのではあるまいか、赤十字の鼻祖ナイチンゲールと云ひ、文學者として有名なるスコットと云ひ、露國の文豪ツルゲネーフと云ひ、何れも動物に對する善意者であつた、吾等は此の善意を押し廣めて日用の調度より咲く花、散る紅葉、照る日、輝く月、凡そ天地の一切に及ぼさねばならぬ

下等動物
に對して

悟りの道

二三六

或る人が「小蟲を踏みにじりて何とも思はぬ人を友とするな」と云うたのを氣憶して居るが、是れは下等動物に對する善意である、人類に對して眞實善意のある者は、下等動物に對しても必ず善意がある筈である、若し吾等の善意を擴張してゆかば、下等動物にも及ぶのであるから、此の心は以て、天地山川、日月草木にも達する筈ではあるまいか。

七 天地の正道

吾等は前述の如く、善意は宗教的には信仰が根底となり、倫理的には圓滿なる人格が基礎となる事を主張し、不具者に對しても、失策者に對しても、外國人に對しても、罪人に對しても、更に牛馬犬猫より下等動物に對

して迄も、善意を以て接せねばならぬ事を説いたが、斯の様な廣大無邊なる善意は何を意味して居るのかと云ふに、畢竟するに天地の正道に従ふことなのである。

善意といふと、何か特別の事のやうに思ふ人があるか知らねど、決して珍奇不可思議なものではない、實に天地の正しき道が其のまゝ、善意なのであるまいか。

佛法は障子の引手みねの松

火打ぶくろに黄鳥のこゑ

と古人も詠うたやうに、實に普通の事である、天に星辰、地に山河、是れこそ天地の正しき道ではないか、吾等が善意を持つというても、此の普通

普通の事

善意の徹底

二三七

の事より外には何もない、然るに混沌たる近代の思想界は、此の普通の事さへも、實行する事が出来ないやうな有様ではないか、此の嘆すべき思想界に對して、吾等は只だ單に一笑に附して居るわけには參らぬ。かゝる不正なる現代の思想は單に撲滅のみに止まらず、更にこの思想に向つて戦はねばならぬのである、これを除くには如何なる方法手段が、尤も適當であるかと云ふに、大いに明教を鼓吹して大義名分を明にし天地の正道に従ふより外にないのである。

大義名文

世の論者は或は云ふであらう、「今の世に大義名分を明にして天地の正道に従ふといふやうな迂遠な事は用をなさぬ」と、成る程問題は迂遠であるかも知れぬ、乍併、彼等は果してよく大義名分や天地の正道の何たるかを了解して居るであらうか、大に疑を挿まざるを得ぬのである。

滑稽な事

予が曾つて繙いた書物の中に、滑稽なる事が記載されて居た、それは「往昔唐に一人の寡婦があつて、夫の死亡の後は如何に勧められても他に縁付かない、然るに其後、間もなくどうかした際にフイと聲を迎へた」とのことである、今一つは同じく「唐時代に誠に睦まじい兄弟の二人があつた、彼等は前後して嫁を迎へたのであるが、弟の方の嫁は美人である、彼等は睦さのあまり互に妻の交換をした」と云ふことである。

枝葉の問題

以上の話は貞操友愛双方共其精神を知らぬ結果、かゝる滑稽なる行爲を平氣でして居たのである、大義名分も吾等の考ふるところでは、眞に其本意を了得せずして單に枝葉の問題にのみ擒はれる結果、混亂せる思想にな

つたのではなからうか。

毫末の差千里を誤る、よく／＼注意を要することであらうと思ふ、故に今日の思想界を安全にし、國體の秩序を保ち、更に進んで國威を發揚するには、是非共、天地の正道と明教の布演を急にせねばならぬのである。

この責任は決して或る宗教家や教育家のみに限られた問題ではない、國民一般が大自覺の下に大いに奮進せねばならぬ時期が到來したのであらうと思ふ、若し眞に天地の正道に従ふことが出來たならば

山の色たにのひききも皆乍ら

わが釋迦牟尼の聲と姿ぞ

の妙味も自ら了解する事が出來て、吾等の善意は、實に宇宙大のもの

國民一般の自覺

なるであらう。

論じて茲に至る、尙ほ一言せざるべからざるは忠告の問題である、友人の過度なる勉強に對する忠告の如きは云ふ迄もないが、其の忠告にして一朝彼の性格に關する問題に觸れんか。

忠告と反抗心

「我、私の缺點を知る、何んぞ彼の忠告を待たんや、現に自ら矯正しつつあるに非ずや、抑も彼が忠告をなすとは片腹痛き行爲なり、彼果して我を忠告するだけの資格ありや、若しありとせば我にも彼を忠告するの資格あり、彼、我を忠告するは、我を侮辱して自ら高しとするの傲慢心より出でしなり、我は彼が如きの言を聴くの耳を持たず」

なご、感情に走りて、十年の親友忽ちにして仇敵となるの場合も少くない

善意の徹底

悟りの道
孔子は「良薬は口に苦くして病に益あり、忠告は耳に逆うて行に利あり」と云うたが、口に良薬、耳に忠言、人情の弱點として是を苦痛に感ずるは是非もない、殊に自尊の心は同輩をして其の瞬間訓誡者と被教者との區別を現せしむるを欲しない、理に於て然る所以を知るとも情に於いて忠告を傾聴するに忍びず、折角の忠告を受けて、却つて悪結果を來す事も往々である、是れ忠告者の胸量せまきに因する事勿論なるも、尙ほ且つ忠告者の善意足らざるか、忠告するの時に誤れるか、處宜しからざるか、言方の悪しきか、其の何れかに座せざるは無い、苟も人に忠告せん程の者は須く對手の自尊心を傷けぬやう、耻辱を與へぬやう、親切と慈愛と寛容とを根底にして是を成さねばならぬ、是れ忠告の原則にして、又、以て善意の内容

である、嗚呼、善意の要や重、善意の力や大、方今の世局、吾等に取りて是より緊急の問題はない、是を以て國民全般の信仰となしたならば、内は國家の和平を致し、外は國威の伸張を見るであらう、斯う考ふれば善意といふ事は決して等閑に附せらるべき筈のものではない。

八 禪的心膽

以上は他に對して善意を以て接せねばならぬ事を述べたのであるが、水泳を知らざる者が溺者を救はんとすれば却つて自ら溺る、道理で、自己の立脚地が健全でないで、他に善意を示さんとして、却つて自尊を傷け、自信を失ふに至るの憂がある、そこで吾等は先づ自己の心膽を練るの必要が

ある、心膽を練るには禪に如くものはない、併し乍ら此の禪的心膽の眞意を誤るやうなことでは却つて坐禪の病が生じてヒヨットすると膏盲必死の病と成つて坐禪地獄に落ちて、未來永劫、坐禪の幽靈となりはせぬかと思ふ、偕て世間に體、相、という言葉があるが禪の上に於ては、體ぢやの相ぢやの、と分つべきことはないのである、所謂一即二、二即一で其一も亦た無いのである、加之、其の一も無いと云ふものも亦々無いのである、然れども假りに初心の者が禪的心膽を練る上の便利の爲に體相の兩面から觀察するのである、若し諸讀者が此の言語に取付いて分別妄想したならば參禪なぞせぬ方が却つて増である、師家の言語に着して坐禪地獄に墮ちては還つて大なる罪になる、故に畢竟這邊の消息は言ふべき者もなければ語る

べきものもない、所謂言語道斷、心行所滅で、人々瞌睡することなく醒々着と、シツカリ脊梁骨を立て氣海丹田に心頭を落付けて即ち眼は半ば開き鼻息微かに通じ緩く衣帯を掛けて心操を調べて、如何々々と工夫し去るが好い、左ればとて心意識の運轉や念想觀の分別は許さぬ、諸縁を放捨し萬事を休息して、只この不思議量を思量せねばならぬ、其の不思議量を思量すると言ふのは即ち非思量である、非思量と言ふのは畢竟絶思量であるサア禪的心膽を練るのは、此の時である、古人大力量を具するすら尙ほ言ふ難入難解と、心猿意馬の分別は許さぬ、肅んで佛祖の警策を拜受せんければならぬ。

偕て、當昔佛顛圓悟禪師が示されたことがある、「乾坤窄く、日月星辰も

一時に黒し、たとひ棒は雨點の如く喝は雷奔に似たるもまた未だ向上宗乗中の事に當得せず、たとひ三世の諸佛も只自知すべし、歴代の祖師も全提不起、一代藏經も詮註し及さず、明眼の衲僧も自救不了、這裡に至つて作麼生か請益せん、箇の佛の字を道ふも陀泥帶水、箇の禪の字を道ふも滿面の慚惶」と、左れば此端的に至りては禪道佛法を論せば却つて耳を汚し口を汚すことを免かれず、然れども初學の爲に陀泥帶水して、禪的練膽術の體と相とを説くのである。

禪の本體

夫れ禪の體たる、高うして上なく廣うして涯なく堅きこと金剛の如く柔なること兜羅綿の如く、火に投ずるも火も焼くこと能はず、水に入るゝも水も亦漂すこと能はず、而も長短方圓の形相を絶し、青黃赤白の色相を

陀泥帶水

禪の一義

離れ、見んと要するも眼光の及ぶ處にあらず、聞かんと欲するも耳根の達する所にあらず、堅には三世を究め横には十方に互り、無限の時間を貫通し無限の空間に充塞して、過去の過去際より未來の未來際に至るまで缺くることなく、餘ることなく、垢くにあらず淨きにあらず、増にあらず、來るにあらず、這箇の全體に至ては一代の藏經も全詮し及ぼさず、歴代の祖師も全提し盡さず、心縁の繫縛を離れ意識の知解を離れ、思惟觀想の分別を離れ文字言句の葛藤を離れ、本體如々として摩尼寶珠の如く、又死猫兒頭の如し、摩尼寶珠の如しと雖も氷壺影像なく、死猫兒頭の如しと雖も八面玲瓏なり、實に東西南北に彌淪して東西南北の方寓を絶し、古往今來に互りて古往今來の邊際を離れ、伸ぶるときんば六合に涉り縮るときんば方

寸の中に納む、大には方所を離れ細には無間に入る、三世の諸佛も這裏に在り、去來を示現し、歴代の祖師も這裏に在りて出沒を假現す、日月星辰も這裏に在りて光明を放ち、森羅万象も這裏に在りて法爾如然たり、故に眼を開けば築着、耳を側れば磕着、手を開けば手に満ち足を擧ぐれば撞着たり、而も與麼なりと雖も這裏の端的に至ては希夷冲漠、沒蹤迹斷消息閃電光の如く擊石火の如く、音もなく香もなく、強て見んと要せば白雲萬里、剛て蹈んと欲せば天地懸隔、捉へんと要せば水中の月の如く、味んと欲せば水中の鹹味の如く、分たんと要せば色裡の膠青の如く恰も波間の胡蘆藤種胡蘆に似たり、故に有歟、畢竟有にあらす、無歟、畢竟無にあらす色歟、畢竟色に非ず、空歟、畢竟空に非ず、事理の相を離れ體用の邊を出

で色空の相にあづからず、有無迷悟の情量を越へ、生佛凡聖の蹤由を絶す、故に道ふ「無邊風月眼中眼、不盡乾坤燈外燈、柳暗花明十萬戶、敲門處々有^二人^一響^二」と然も恁麼なりと雖も修せずんば顯れず證せずんば得ることなし、參學の志士宜しく實參實究して心膨を練らねばならぬ。

次に禪の相たる、天に在ては日月星辰、七曜九曜、廿八宿と顯れ、地に在りては森羅萬象、草木國土、人畜家屋と顯れ、春は百花爛熳、秋は萬山紅葉、火は乾けるに就き水は濕へるに就き、鳥は空中に飛び魚は水中に泳ぎ、松に古今の色なく竹に上下の節ありて無始劫より未來際に至るまで曾て變遷あることなし、皆是禪の當體現成にして而も禪の相貌にあらざるはない、故に釋尊四十九年の説法も只這箇の事を説き、一千七百則の歴代祖

師の公案も只這箇の事を示し、洞山の五位も臨済の四賓主も又は四料簡も只這箇の事を説話せしに外ならず、故に禪の相たる、見んと要せば即ち見よ、聞かんと要せば即ち聞け、見色見れ禪、聞聲是れ禪、苟も他に向て馳求せば十萬八千、春は雪裡に一朵の寒梅蕾を破つて谷出る鶯兒の法法華經を謠ふも、夏は森々蒼鬱たる綠蔭深き處に一聲の杜鵑、歸去來を咏するも禪心を照す秋一輪の明月も、香爐上に刹那生死を示せる、三冬一片の白雪も、皆是れ禪の相貌、當體現成にあらずして何ぞや、故に或時は三斤の麻と現じ、或時は庭前の柏樹子と現じて、居るので、斯かる宇宙の當相は悉く禪の相といふことが出来る。

即ち禪には前述の如き本體ありて、又、前述の如き形相がある、此の本

三冬一片
の白雪

客観より
主観へ

體と形相とを、只だ單に向うに見て居るのみでなく、直に自己の心膽の上に持ち來さねばならぬ、偕て真に禪の本體と形相とが客観より轉じて吾等の主観の上に顯はれ心膽の上に現じたならば、其の人は實に禪的修養の出來た人である、此の禪的修養が出來たならば、其の人は禪的心膽の人といふ事が出来る、此のやうな禪的心膽が出來て居るならば、世上萬般の問題に對して、善意を以て對することの出来るは云ふまでもないのである。

九 自由の活動

吾等は先に、如何なる場合に當りても、相手の感情を害せぬやうにするのを八方美人主義と稱し、八方美人の自由な活きは善意の人にして初めて

善意の徹底

動靜の二面

能し得る處であると述べたが、眞に八方美人主義の自由の活動をした
思つたならば、禪的心膽を練つて、大不動の根底を作つておかねばなら
い、八方美人主義の自由の活動を動とすれば、其の根底とも云ふべき禪的
心膽の練磨は實に静である、大なる動は大なる静より出で、大なる静あり
て初めて大なる動の活動が出来るので、動靜二面の修養が完全して、初め
て大なる善意の實現を見ることが出来るのである。

此の動靜の二面は獨り吾等の一身上に存するばかりでなく、凡そ天地宇
宙の有様は悉く動と静との兩方面を具有して居るのである、彼の春夏秋冬
の變遷、日月星辰の運行は悉く動の有様であるが、其の變遷運行するとい
ふ眞理は幾千年、歳萬年の間、更に變つた事がないといふのは實に静であ

長者は長法身

る、此の靜の根底の上に顯現したる現象界を見れば、春は花と現じ、秋は
月と顯はれ、或時は精底一片の肉と現じ、或時は桃花の色と現じ、或時は
翠竹の聲と現じ、或時は乾屎橛と現じ、或時は白砂青松と現じ、鶴は自ら
長く鳴は自ら短く、鳥は自ら黒く鶴は自ら白く、長者の長、短者の短、皆
是れ禪の當體現成底の相貌なり、故に三世の諸佛も眼耳鼻直を以て世に出
現し、歴代の祖師も兩手兩脚を以て世に出現し、吾等も亦、四肢五體を以
て世に出生す、目に在ては物を見、耳にあつては聲を聞き、手に在ては
執捉、足に在ては運歩、日は朝に東に上り月は夜に西に沈み、久遠劫より
未來劫まで一毫髪も變ずることなく動することなし、是皆、禪の現成底な
り、這邊に至りて四の五の八百を用いて擬思し去れば千仞擧づ可からず、

畢竟如何、月は天に在り、水は瓶に在り、夫れ天下の諸人、實參實究の結
果、自由の活動をせずして可ならんや。

今や此の禪的心膽を活用し去れば、宛轉自在、珠盤に走るが如く盤珠に
走るに似たり、或時は白日晴天に怒雷を奔らしめ、或時は黒漆崑崙を夜
裡に走らしめ、或時は平地に骨堆を生じて白浪滔天せしめ、或時は四
大海を躑躅して火中に白蓮を生せしめ、或時は一莖草を拈じて、丈六の
金身となすこともまた得たり、或時は丈六の金身を請して一莖草となす
も亦得たり、或る時は眉毛端上に恒沙の如來を出生せしめ、或る時は三
世の諸佛を殺し、或る時は一棒の下に歴代の祖師を罵る、這箇の活作用に
至りては、世尊三昧世尊知らず、迦葉三昧迦葉知らず乃至吾人の三昧は吾

禪の妙用

活用の様々

任運無作の活動

人亦知らず、日用光中、回頭轉腦別事なし生より死に至るまで行住坐臥只
これ是れで、知らず知らず則に契ふのである、恁麼の田地に至りては、達
磨も不識、二祖も不可得、乃至三世の諸佛も口壁上に懸く、然も與麼なり
と雖も鐘鳴れば法堂に赴き飽響けば齋堂に赴き茶に逢うては茶を喫し飯に
逢うては飯を喫し、任運無作の妙用、他の眼を假りて物を見ず、他の耳を
假りて聲を聞かず他の鼻孔を借りて香を嗅がす他の口を假りて飯を喫せず
開單展鉢、阿屎放尿、更に他にあづからず、二六時中、只不思議にして現
じ不相互にして成するのみ、恰も鳥の空に飛んで空を忘れ魚の水に泳ぎて
水を忘るゝが如くで、七顛八倒、胡蘆天胡蘆地の大自在の活動である、是
れ即ち禪的活動の謂である、故に道ふ「空濶うして天に透り、鳥飛んで鳥

の如く、水清うして地に徹し、魚行いて魚に似たり」と、如何にも自由自在の活作用では無いか。

此の自由自在の活作用を現するには、深く實參實究せねばならない。古から禪をやつた人は兎角禪病に囚はれて此の自由自在の活用が出来なくなるの弊がある、夫れは未だ真に禪の處世法を知らないのである。「百尺竿頭更に一步を進むる」と云うて、禪の奥義に達したならば、其の奥義の處を尙ほ一步すすんで「到り得來りて別事なし、蘆山は烟雨、浙江は潮」といふやうな境界を實現せねばならない、此の境界が實現しない位ならば、禪をやつた事が却つて害になるのである、古人は是れを枯木死灰の漢と稱して、非常に慊つて居る、吾等が禪的心膽を練るのも畢竟するに此の大活用

を現成するにある事を忘れてはならない、禪の體相は前辨の如く、禪の活用は前述の如くであるとしたならば、禪によりて大に自己を修養して、以て吾等は此の自由な活動を善意の上に応用せねばならぬのである。

禪的心膽を練つて自由な活動をするといふことは最も徹底したる處世法である、不徹底な處世であつたならば、善意を以て他に對するといふ事も自ら不徹底にならざるを得ない、吾等は眞實徹底したる善意を以て他に對したいものである、昔から禪によりて心膽を練磨した多くの人々は、此の徹底に到らうとして色々苦心したものである、其の苦心の方法には色々あつたが、臨濟宗などでは公案と云うものに就いて工夫を凝した、譬へば「無」なら無と云ふ字について一生懸命に考へて居る、「有」なら有といふ字

について一生懸命に考へて居る、そして考へに考へぬいた結果、忽然としてインスピレーションに接する、是れを悟りといふのであるが、此の悟りといふのは最も徹底したる境界である。

昔、僧ありて趙州從念禪師に「狗子に還つて佛性ありや也た否や」と問うた、すると趙州答へて「無」と言はれた、狗の子に佛の性質がありますかとの質問に對して無と答へられたが、或る時、同じ質問に對して「有」、有りと答へられた、例へば此の「有」とか「無」とかに眞に徹底する迄、考へて見るが良い、處が此の無こそ、只是れ無（絶對無）である、盡天盡地に響き渡つた無である、三千大千世界に鳴り渡つた無である、此の無の響きは過去無量劫の古より盡未來際迄の末まで、不斷絶である、今日に至るまでも

餘韻嬾々として絶えぬのである、畢竟見來れば、這箇の餘韻が、春に成つては花と咲き、冬に成つては雪と降り、秋に成つては紅葉と散り、夏に成つては杜鵑と鳴き、加之、雨竹風松も鶉鳴雀噪も白雲流水も明月清風も天に日月星辰、地に森羅萬象も、皆悉く、只だ這の無の響ではあるまいか若し此の絶對無の響きを聞收する底の那人ならば、昔日の趙州老と相見了の境界である。

昔日、青牛和尚と云ふ人が在つた、此の無の餘韻を聞取つた時、忽然として桶底を脱したのである、其時自ら言の葉に溢れた句が面白い。

大地山河藏此無
山河大地露此無
春花與冬天雪
非有非無亦是無

善意の徹底

と歌ひ出したが、何んと壯絶快絶ではあるまいか。

又昔日洞山悟本大師、秋初夏末に垂語して示されたことがある、「兄弟或は西し或は東す、萬里無寸草の處に向て去るべし」又曰く「萬里無寸草の處如何が去らん」と。

これは洞山無寸草の話と云ふのであるが、初秋夏末と云ふは、所謂禪門に於ける、九旬安居が了つて、送行の時である、秋の初め夏の了りであるに依つて、雲兄水弟は、大送行して、或は西し、或は東して、東西南北に行くことであるが「何れも道草を食うてはならん、真直に去れ」と云う事で、真に自由自在の活動の出来るやうに、善意に徹底するまで努めよと示されたものである。又曰く、萬里無寸草の處、如何が去らん」で、吾等は

飽くまで熱心忠實に一つの問題を研究せねばならない、其の研究の結果として、禪的心膽(静)が練られ、一面には自由の活動(動)が出来るので、徹底した善意の實現が初めて見らるゝのである。

十 結論

是れを要するに一切萬物に對して善意を持たんと欲したならば、其の根本基礎として禪の本體と形相とを知りて、禪的心膽を練り、是を日用の行爲に活用して自由自在の活動を顯はし、一舉手一投足がみな善意であると云う處まで進まねばならぬのである。

是れが最も徹底したる善意であるが、吾等は必ずしも悉くが禪の悟りの

悪い漁夫

境界になりて善意を顯すといふ事は出来難いのであるから、全般の人に禪的善意を要求するものではないが、少くとも一切行爲の根柢を善意に置いて貰いたいのである、昔、印度に珊瑚を収集する漁夫があつた、或る時一千人の團隊を作つて遠き海へ珊瑚を取りに出かけた、處が中に一人の腹黒き漁夫があつて、船の中へ一杯に積み込んだ珊瑚を自分一人の所有にしやうと思つた、夫れには他の九百九十九人を悉く殺して仕舞はねばならぬと考へ、船の陸へ着かない内に、一同のものを海中の藻屑とするの悪計をめぐらして居た。

すると他の一人の漁夫、此の計畫を看破して、何卒して多勢の漁夫の命を助けたいものであると思つたが、九百九十九人の生命を助けるには、腹

九百九十九人の生命

黒い一人の漁夫を殺さねばならぬ、經文には「人を殺せば地獄に墮つ」とあるが、我れ今、九百九十九人を助けんとして、此の一人を殺さば必ず地獄に墮つるであらう、如何したものであらうかと頻りに考へて居たが、最後に思ひついた。

「マ、ヨ、九百九十九人の生命が助かれば、自分一人ぐらゐ地獄へ墮ちてもかもふものか」

と、竟に腹黒い漁夫を殺して仕舞つた、殺しはしたけれど氣にかゝるのは經文の言葉、自分はどうしても地獄へ行かねばならぬ事かと心配し乍ら釋尊の處へ行つて尋ねた、すると釋尊は

「汝は善意を以て人を殺したのだから地獄へは墮らない」

無寸草の地

と答へられたので漸く安心したと云ふ事である、倫理學では動機を尙ぶが吾等は佛神に非ざる限り失策や間違ひは免れがたい、只だ善の動機により善意を以て行動をなしたならば、時に少瑕は見逃すべきである、否な眞に大なる善意があらば、其の時には其の行爲は善惡を超越して居るのである前述の無寸草の地と云うたのも此の善惡超越境であるが、ウツカリして文字に迷うて草の中などに這入るまいぞ、萬里無寸草の中に向つて去るが好いぞと洞山大師は示したのである、此の無寸草と云ふは畢竟那邊地であらうか、先づ此の地球上で云うたならば、歐洲大陸の大沙漠に往つたならばいざ知らず、五大洲中何れの地に行つても草一本もない處はなさそうである、何處の邊が無寸草の地であらうか、ヒヨットしたならば、此の無寸

不染汚没蹤跡

草の地は、或は陰陽不到の地であるかも知れぬ、或は無寒暑の地であるかも知れぬ、即ち陰陽の日月を照すことの出来ない、春夏秋冬の氣候も及ばざる處であらう、此の陰陽不到、寒暑不到の的處が、實に萬里無寸草の地である、有無迷悟と云ふ草もなく、六凡四聖と云ふ草もなく、人境心法の音沙汰も離れ、佛邊祖邊の熱氣熱漫も絶し、長短方圓の形相も無く、青黄赤白の色相も離れたる實に絶待的の極處であらう、人々只だ這の絶待的の極處に行履することが出来得れば、始めて脚下無寸草の地の往來である此の無寸草の地に往來してこそ日用光中不染汚没蹤跡にして、脚下總べて百自由、鳥が空を飛んで空を忘れ、魚が水に游いで水を忘れ三界の中に在つて三界を出で、生死の中に在つて生死を離れ、六道に輪廻して苦樂にあ

づからず、天堂地獄、遊戯三昧、輪々轉々の風流である、這裡に至つてこそ農業家の農業を営むも、商業家の商業を営むも文武百官の廟堂に立つて治國安民の策を講ずるも教育家の教育に従事するも、軍人の戦の庭に立つも、下女や丁稚の、水汲庭掃きも即くり其儘、無寸草の地に働いて居るので日用光中の運作顛動が三昧王三昧の悟の道である、左ればと謂つて、此の無寸草の地を外に向つて求めまいぞ、故に洞山大師は「無寸草の地如何が去らん」と示された、萬劫の繫驢楪であるのぢや、畢竟無寸草の地は去來を絶して居るのである。

此の去來にあづからない生死にあづからない、迷悟にあづからない、有無を離れ生死の邊を絶してこそ、趙州老漢の無である、只此の無、縦に三

世を究め、横に十方に互り、前は過古久遠劫の昔より、後は盡未來際の間まで不増不減、不垢不淨の無にして大には方所を絶し、細には無間に入る即ち絶對的消息である、陰陽不到寒暑不及の消息である、之れ即ち眞箇無寸草の地である、這の無寸草の地が、即ち之れ無字の端である、大地山河も此の無に藏れ、山河大地も此の無より露れ、春天の花も冬天の雪も畢竟、有に非ず無に非ず只だ是れ無(絶對無)である、只這無、見んと要せば、白雲萬里、踏まんと要せば天地懸隔である、禪的心膽を練りて善意を獲得せんとするの士、以て如何となす、天上の月を貪り見て、手中の玉を失却してはならない、眞に此の無寸草の地が了解出來て、其の地に逍遙する事が出來たならば、其人の處世は其の儘善意の現成したる大安樂である

吾等は須らく此の大安樂を得ねばならない。

偕て吾等の善意も究竟して茲に至れば善意の善意と名くべきものもない
「味噌の味噌くさは上味噌にあらず」で、味噌くさき所を通りすぎて只
だ是れ味噌、只だ是れ善意と云うの外はない、絶對の善意である、此の絶
對の善意を以て四圍の萬法に對せば萬法そのまゝ善意の表現となるのであ
る、以下更に吾等の生活問題に移りて、生活と悟りの道との關係に就いて
述べやう。

第四章 生活の真相

一 生活とは何か

同じ人間と生れ乍ら或人は俾を引き或人は俾に乗る、俾上の人「俾夫君
君は幾歳かネ？」と問へば「へい私は三十六でムいやす、して壇那は？」
「僕か、僕も三十六だ」左様でげすか、同じ三十六でも乗る人もあり、引
く人もある。「夫れはさうサ、君のは四九(引く)三十六だし、僕のは六
六(祿々)三十六だもの」と云うたと言ふ話がある、同じ三十六歳の人間で
も俾を引く三十六歳の人もあれば祿に有りついで得々然として俾に乗る三

十六歳の人もあると云ふのが人生、試に「俾夫君、君は何の爲に那箇に働くか」と問はれ彼は「食はねばならぬから」と答へるであらう、此の食はねばならぬと云ふ事の爲には、他の人が妻女を携へて花見遊山に出る時にも、自分は俵を引いて人を乗せねばならぬと云ふ人もある。

併し乍ら茲に食ふと云ふのは單に食物を口に入る、事のみを指すのでは無い、住むに家屋を要し、着るに衣服を要すると云ふわけで、廣く生活する事を意味する、生活の生はすぎはひにして活はいくるである、即ちすぎはひいくるのが吾等の生活で、此の生活のためには直接間接、水と火との恩恵を受けて居るから、孟子は「民水火にあらざれば生活せず」と云うた吾等は水と火との恩恵を受けて、衣服を整へ、食物を造り、家屋を持ちて

生活の字義

茲に生活の根柢が出来る。

然るに人間の生活は單なる生存と云ふ事とは意味が違ふので、ただ生存するといふだけならば、空飛ぶ鳥も野を驅る獸も、衣服の心配こそ無ければ食と住とを求めて居るのであるが、人間は單に衣食住の満足を得ると云ふだけで無く、意義あり目的ある計畫を立て、是れに向つて進んで行くのであるから、單に生活の根柢たり中樞たる衣食住が揃つたと云ふだけでは満足する事が出来ない。

此の満足することが出来ないといふ精神があるから茲に初めて向上進歩が企てらるゝ、又、生存競争といふ事も現はれ來りて、乃ち社會は構成せられ、統治機關あり、經濟機關あり、教化機關ありて共同生活の實現を

生存と生活の區別

宿りの道

見るに至つた、木皮を以て衣服を作り、果實を以て常食となし、草茅を以て住所とした昔と異りて、所謂文明社會の見るに至りては、吾等の生活は單なる原始民族の生活とは頗る其の趣を異にして

- 一、文明世界の一員としての生活
- 二、立憲國民の一員としての生活
- 三、自治町村の一員としての生活
- 四、家族の一員としての生活
- 五、個人としての生活

なぞ、二重にも三重にも生活關係があるので、吾等の生活と云ふ意味は廣くして且つ複雑である、此の複雑廣汎なる生活圏内に居る以上は、是れ

に對する相當の準備が無くてはならない。

- 第一に衣食住を得るの方法として相當の職業に就かねばならぬ。
- 第二に職業に必要な知識は勿論、時代の智識に後れざるやうにせねばならぬ。
- 第三に時勢を洞觀するの明が無くてはならない。

是れ等の事を欠いたならば、今日の文明社會に處して、生存競争場裡に生活して行く事は出来ないのである、況して人はパンのみによりて生活する事が出来ないから、茲に心靈の要求も起り來りて、宗教的生活といふ如きも現れて來た、或る人は人間生活を縦に觀察して五段階に分け、第一を無能力的生活として、生れ落ちた嬰孩より是非曲直未辨の少年時代の未

だ以て何事をも論ずるに足らぬ時代を指し、第二を罪惡的生活として法律上の罪人を指し、普通人間の能力を有しながら、正しき人間の道を踏ます詐偽、横領、賭縛、火付、強竊盜、殺人等の罪惡を犯し、其の他、國家の法律に問はるゝ如き行為を爲す者の生活、即ち普通人間の最も下劣なものを云ひ、第三には法律的生活を立て、法律にさへ觸れなければ、如何なる事も敢えてすると云ふ三百代言的生活を指し、第四には道德的生活を立て、法律に抵觸せざることは勿論、世の道德にも觸れまいとして居る所謂律儀者の生活を指して居るが、併し乍ら道德に觸れまいと考へて居るやうでは未だ充分なる生活では無い、「味噌の味噌臭きは上味噌に非ず」で眞箇の道德は道德其物をも打ち忘れて、「眞忠は忠を忘る、念々是れ忠、眞

孝は孝を忘る、念々是れ孝」とならねばならぬと云ふので、第五に宗教的生活を立て、

何事のおはしますかは知らねども

忝けなさになみだこぼるゝ (西行)

に至りてこそ、生活の最上乘であると云うた、是れ孔子の所謂「心の慾する所に随つて矩を起えざ」る者ではあるまいか。

斯の如く人間生活は横に觀察して五重の關係があり、縦に觀察して五種の狀態があるが、是れを大きく二つに分けて物的生活と心的生活との二つにする事が出来る、即ち千態萬狀の生活關係から一切の外皮を剥ぎ去つて、生活の物的基礎は何ぞと云はゞ衣食住である、此の衣食住の物質生活

は所謂實用生活であるが、此の實用生活以外に精神生活あり、美的生活もあるが、是等を概括して心的生活と云ふことが出来る、吾等の生活は畢竟して物的生活と心的生活との二つである。

今や生存競争 頗る猛烈にして生活難の叫は就職難の聲と共に都鄙に喧しきに當りて、吾等の生活に關して物質と精神との兩面から一應の研究をして置くと云ふ事は極めて必要であらう、先づ生活上の第一必要物たる食物に就いて瞥見しやう。

二 食物と生活

日本天台宗の開祖傳教大師は「衣食に道心なし、道心に衣食あり」と云

はれた如く、錦繡綾羅を纏ひ、美味佳肴に飽くの人必ずしも善人にあらず却つて善を行ひ道に従ふ心のある人には衣食は附いて廻つて、正道に就ける人には「お天道さまと米の飯は付いて廻る」筈であるのに、世には一腕の飯さへも得ることが出来ないで苦んで居る人が數多くある、東京府の大正四年度の自殺者の數は合計九百七十二人にして、其の原因とする處は失戀とか家庭の不和とか云ふものもあるが、多くは生活難より來れる精神錯亂自暴自棄等であるのを見れば食物を得ると云ふ事は決して容易の業ではない、「恒産なき者には恒心なし」とか「貧すれば鈍する」とか古人も云つた如く、今日にありては「道心に衣食あり」の金言も容易に實現せぬ。

諸有不徳は是に萌芽し、諸有罪惡は是に構成せられて、人生の悲愴多く

小笠原流

酒の効力

生活難から生じて来る、併し乍ら「衣食足つて禮節あり」で、愈々衣食足るや、更に他の欲望を生じ、泰平三百年、人は平和に馴れて生活の難を忘れし江戸時代にありては食物に關して小笠原流なる禮節をさへ考へ出した曾つて食物に關して左の如き文を物した事がある。

酒は誠に趣きおほき者ぞかし、微薰陶然として頬に淡紅さし、ニコヤカに面白きことの二つ三つ云ひ出でたるなど、殊に愛たし、血の循環良くする事のみにも、酒の効能決して尠くは非らず、されど「酒は百薬の長ぢやけれ共さうちやけれ共」飲み過ごして管捲くなど、見苦き事の限にこそ世のなべての事は、過ぎたるは及ばざるにも如かず、程を守るこそ賢き人の仕業なれ。酒の饗應の宴に侍べらば、無下に無口なる宜しからず、静か

汲ひ物

に談話して一座の興を催す工夫こそ良けれ、されど饒舌や身振など宜しからず、或は不潔なる想を起さしむる話題は爲すべき者に非らず、汲物は酒に先立ちて食するもの、先づ汁を吸ひて後、實を食すべし、一度にして汁及び實の全部を喫し盡すは、心ある者の所作には非ず、又、椀を膳に置かば静かに蓋すべし、取り放しは悪し、初めて酌受ける時は己より下座の人に一禮して、盃を左掌に取り、右手を添へて酒受くること見場よけれ、「酒なくて何の己が櫻かな、待つて居ました」と曰はん許りに、取急ぎて酒うくるは見悪し。盃を長者より得ば兩手にて是を受け、一禮して酌人より酒を受く可く、返盃せんとする時、盃洗なきか或は在れ共遠方にて頗る煩はしき時は、淨き紙にて盃椽を拭ひ兩手にて呈すべし。尋常は低き人よ

禁酒會の可否

り貴人に呈せぬものぞ、されど望まれなば返呈すべし、總じて多く吞む可からず、主人の都合、同席の様子等に注意して、己れの思ふがまゝに吞み續くるは甚だ心得ぬわざぞ、近頃は禁酒會など有りて一滴も吞まじとするものあれど、是れ如何の者にや考へものなり、されど本來より一滴も吞み得ぬ人の強いて吞み習はんとするは愚なり。唯だ品よく適度に吞みて座席に相應しかるこそ良けれ、「酒のんで死んだものは鱈ばかり」と云へど、豈に鱈ばかりかは。

菜の批評

菜に就いても亦、心得べき事おほし、菜の味に關して、一寸賞讃するは目出度き事もあれど、概して批評せぬを良しとす、移り箸は食事法の禁する處、菜より菜と續け食ふは具悪くければ也、膳の上のもの挟み食ふ順序

菜を食ふ順序

は菜の種類や數に依りて定まらざれど、飯と飯との間に菜を食ひ、同じ菜を二度續けて食はず、又、一品くひて直に他の菜に箸を附く可らず。例へば先づ汁を吸ひ、次に飯を食ひ、次に平、次に飯、次に向う附、次に飯と順次に食ひ廻すなり、一順せし後は其の順序に拘泥するの要なし。酒の場合も菜の移り箸すべからず、受け吸も悪し、汁の再進など給仕人より受け取りたる時、一旦膳に置く事をせず、其まゝ直に吸うは不可なり。又、何れを食せんかさて菜の撰擇をなし、箸を取りて躊躇するを迷ひ箸と稱して嫌ふものぞ。膳越しと稱するは膳の向ふに在る者を手に取り上げずして直に食する事にて、古より忌むべき食ひ方として知らるゝ者なり。器の底に在る物を探り試みるを古來探り箸と云ひて不作法なる者に數ふ、以上の移

箸、受け吸、迷ひ箸、膳越し、探り箸の五を菜五禁と稱す。菜の中に毛髪などの入り居るあらば、人の氣附かぬ様に静かに取り去れ、聲に出して人に氣付かしむる時は、他の人も同じく料理に對して不快の念を抱くぞかし、同座の長者もし箸を休めて物語らば、己も箸を休めて應答せよ、口中に物を含み乍ら談話し、又、口を開き乍ら食ふべからず、洋食の場合にスプーンを喫せんとせば、左手を皿に添へ、右手に匙を持ち、手前より向ふに音せぬ様にすくひ、匙の側縁にて喫するが法なり。

肉菜はナイフを右手に持ちて適宜に切り、左手のフォークを以て食すべし、肉を切るには腎を張らず、静にナイフを以て軽く肉を引く可し。休む時は、ナイフの柄を手前にし、刃を左方に向け、フォークは仰向けにして

ハ字形に皿中に置く可し、食ひ終らばナイフ及びフォークの柄を手前にして、真直に皿の中に並べ置くか、或は、柄の方を開き、先を少し重ね置く可し。

飯を食ふに當りて不作法六箇あり、注意すべき事にこそ。

- (一) 又盛り、飯を箸にて腕中に抑へ付くること。
- (二) こみ箸、箸にて食物を無下に口中に押し込むこと。
- (三) 甜り箸、箸を口に深く入れて甜ること。
- (四) もぎ箸、箸に附ける飯粒など口にてもぎ取ること。
- (五) そら箸、一旦食物に向けし箸を中止して、空しく留むること。
- (六) 睨み食、物を食しつゝ、碗の上より窺き見して、あちこち睨み廻す

こと、是れ等何れも慎しむべし。

飯汁などの蓋を取るには、右に在る者は右手に取り、左手を添へて翻し膳の右側に置き、左に在る者は左手に取り右手を添へて左側に置く可し、若し又、西洋風の料理にしてパンの備へある時は、开を指もて割き、適宜にバターを塗りて食ふ可し、口にて噛み取り、或はナイフを以て切るべからず。バターはナイフを以て、初めにパン皿の隅に取り置き、更にパンに塗り付く可し、總じて食ひ過して肩にて息するなど、酒の呑み過と等しく、いとほした無し。饗應終りて退散の時刻來らば主人及び主婦に挨拶して適宜に退散するが良し、長者より先に退散するは禮に非ざれど、止むを得ざる時は、其の座の模様を見て余り人目ひかぬ様注意して静かに退く可し、尤

食ひ過ぎ

も時に依りて上席の退散を一同の者まてる時の如きは、他客の心情を察して早立ちするは心ある人の仕業なり、以上些事に似たれど、又大に心得べき事になん。(了)

簡易生活

右に述べたるは民間の作法として一般に行はれて居る事である、此の位の事は誰人も能し得る處であるが、餘りに小無束しい事にまで氣を勞するのほ感すべき事では無い、況んや簡易生活の唱道せらるゝ今日に當りて、實際生活上に影況なき些々たる事に拘泥するのは宜しく無い、唯だ一通りの心得があつたならば充分であらう。

三 住居と衣服

衣食住の三者の中、食物に次いで原始的に必要なものは雨露を防ぎ猛獸を避くる爲めの住居である、偕て食物と住居とは原始民族に於ても、是れなくては生存し能はざる必須のものであるが、衣服は少しく其の趣を異にする、食物に豊かな熱帯地方は裸體のままに生活し得べきが故に衣服は必要のものでは無い、然るに寒帯地方に到りては一枚より二枚、更に厚くして重き毛皮類を用ひねばならぬと云ふ事になる。

衣食住の三者の中、食物に次いで原始的に必要なものは雨露を防ぎ猛獸を避くる爲めの住居である、偕て食物と住居とは原始民族に於ても、是れなくては生存し能はざる必須のものであるが、衣服は少しく其の趣を異にする、食物に豊かな熱帯地方は裸體のままに生活し得べきが故に衣服は必要のものでは無い、然るに寒帯地方に到りては一枚より二枚、更に厚くして重き毛皮類を用ひねばならぬと云ふ事になる。

かく衣服よりは住居、住居よりは食物と云ふ順に、人間生活上、其の必須の程度に輕重あるが、此の住居と衣服も、到底、生活上、絶対に不

藪醫者の玄關

必要とする事の出来ないものである、殊に「藪醫者の玄關」なる語に見れば住居の程度は延いて中なる主人公の如何を思はしめ、初相見の人に對しては先づ衣服によりて其の人を判断すると云ふ位であるから、吾等の住居と衣服とは、現代社會に生活する以上は、等閑に附すべからざる問題ではあるまいか。

東洋と西洋

併し乍ら「難波の葦は伊勢の濱萩」で、所變れば品變るものであるから住居や衣服といふやうな物も時により處により同一ではない、況んや東洋と西洋とを比較して見たならば、其の差異頗る甚だしく、歐米人の洋服、日本人の衣装、彼は煉瓦を以て家となし、此は樹木を以て家となす、抑も斯かる相違は其の源を何處に發したのであらうか。

生活の真相

人種の別

今日學界一般の定論によると人間一元論を基礎として、世界のあらゆる種族を説明せんとして居る、即ち今日種々なる生活をなせる處の世界あらゆる人種は元中央アジアに集まつて居たことが解る、即ち東の方へ移動したものは日本人、支那人、印度アールヤ人などで、南に行つたのがヘブル人、埃及人となり、西に向つたのが即ちギリシヤ人、ケルト人、チュートン人、更に西へ行つたのは、アングロサクソン人となり、アメリカ人となつた、アメリカ人は最もいつ迄もその移動を止めなかつたものである、この人種の移動のことを英語では Migration といふのである。

移動の原因

この移動は何に原因するかといふと、判然した事は解らぬが、どうも食物に關係があるらしい、即ち一つ處に居ると食物が無くなつて仕舞ふから

太陽崇拜の原因

更に他の食物の豊富な場所を見つけて、そこへ移るのである、然らば何故東へ行つたか、西へ行つたか、といふことは、太陽の運行に基いたものらしい、即ち東へ向つて移つた者は午前の太陽を標準とし、西へ向つて行つたものは夕日をその目標としたものらしい、だから日本人などは太陽をその國民のシンボルにして國旗に迄して居る、伊勢の二見浦など、そのよい例で、同時に極端な太陽崇拜の國民であるのだ、従つて世界でも有名な早起國である。所が西へ向つて行つたものは夕日が標準だから、夜は一時二時三時位迄イツまでも起きて居るが、朝は決して早く起きない、アメリカの國旗が星の形などは日本の日ノ丸と同時に最もよくそれを現はして居る。この人種の移動は早くから定住の地を見出して、止めたものと、また

何時までもそれを繼續したものである。
 印度アールヤ人や支那人などは、最も早くから移動を止めて定住生活を
 やつたが、西へ向つたものは、いつ迄もそれを繼續した、チュートン人、
 ケルト人、スラブ人等それである、所で定住生活を早くから始めた人種は
 農を以て基礎としたが、否らざるものは牧畜を以てその生命とした、それ
 は東西文明の根本的の差異の源なので住居や衣服の相異せし原因も此處に
 ある、即ち、一口に言へば、東洋文明は、定住文明、靜的文明、農業文明
 であるが、西洋文明はそれと反對に、移動文明、動的文明、牧畜文明であ
 ると言ふことが出来る、即ち道德も宗教も殊に生活も總てこの根本的相異
 から演繹して考へる事が出来るのである、而してその對照の最も代表的な

東西二種の文明

習慣の合

のが支那人と米國人である、といふ事が出来る。
 早い話が東洋では五穀を以て常食とするが、西洋では肉食である、ま
 た衣服の點に於ても東洋は木綿や蠶の絹を以て作つた衣服、アチラでは獸
 皮や羊毛でもつて衣服を作る、尤も近頃では大分東西の習慣が合致して來
 て日本でも盛んに肉も喰へば洋服も着るし、向うでも、日本の着物が流行
 したり、また菜食主義者なども出て來た、即ち Vegetarian といつて、バ
 ーナード・シヨオなどは盛んに是を主張してゐる一人である、彼の Food-
 reform (食物改良運動) といふのもそれである。
 こんな譯で東西生活の差異といふものは、一は農を基本とし、他は牧畜
 を基礎とする點から出發したものであつて、この事は總ての文明——哲學

宗教、科學、風俗、習慣、道德の上に一貫して流れて重要な根本要素になつたのである、此の重要な根本要素よりして、東洋人の住居や衣服は西洋人の夫れとは全く別物になつた。

獨り物的生活のみならず、心的生活の方面に就いて是を考へて見ても、東洋文明は靜的な農業文明の上に培養されたものであるから、その成果は之に應じて、やはり靜的内面的に向つて發達したのである、即ち印度の哲學、宗教、及び支那の道德と、西洋の哲學、宗教、道德とを比較して見ると兩者の差異がよく解るのである。

抑も印度は土地豊饒にして氣候が暖かいから、この土地に住せる種族は早くから生活の保證を得てゐた爲めに、彼等の精神は、物的生活の問題に

對しては別に何等考究するの必要がなかつた、従がつて彼等の精神は甚だ餘裕があつたのである、その爲めに彼等の思索は甚だ内面的に向つて冥想を盛んにやつたものである、今日では「自我とは何ぞや」とかいふ事が急に流行り出した、様であるが、印度では斯様なことは非常に早くから討究せられてゐたので吠陀や優波尼沙土や佛教の如くに絢爛として花の様な大哲學や大宗教の産れたのも即ちこれ故である。

然るに西洋文明は移住文明、動的文明なるが故に、思想は自ら人間對人間の上に移されて、深刻な哲學や宗教の上に大なる果實を生んだのではなくて、工業や法律や商業の方面に非常な發達を爲したのである、今日誰しも歐米の工業の盛んなるに一驚しないものはなからうが、その淵源を尋

ねて見れば、また自らその由る所あるを肯ふであらう。
所で東西生活の差異に就て、最も明瞭に色別せらるゝものは、實にその
道德、習慣、風俗の上に於て見らるゝ兩者の差異である。

農業生活

元來農業の盛んな土地は、多くの経験を嘗め盡して來た老人の智識が必
要である、それは作物を造る事は毎歲同じことを繰返すのであるから、什
うしても若い者の経験よりも老人の経験の方が確かなのである、そこで老
人は有難がられまた重寶がられ、従がつて大切にされるのである、此れ東
洋に於て特に孝といふ思想の發達したわけである、之と同時に家を重んず
る事も發達し養子制度などいふ東洋固有の習慣も出來たのである、年長
者を敬ひ、老人を勞はるといふこの美風は實に東洋固有の良習慣である

敬老思想

のだから、西洋文明の輸入に連れてこれを忘れてはならぬ。

所が西洋にあつては、移住文明であるから、老人といふものは甚だ厄介
がられたもので、従がつて孝などいふ思想は起らなかつたのである。あ
る西洋の話には斯ういふと書いてある。それはある夫婦親子の一家族が
此の村から彼の村に移住するとき川の一本橋を渡らねばならなかつた、兼
兼老人を邪魔にして居た息子はこれ丁度よい機會が來たといふので、お父
さんを先きに渡らせて、自分は後から行つて、そのお父さんを川の中へ突
き落して殺してしまつたといふことである、これなどはチツト極端な話で
あるが、またその一面が覗がはれる。

夫婦關係

次に夫婦關係に於ては、東洋は一夫多妻であるが、向ふでは一夫一婦主

義である、これもつまり東洋では土地を所有して財産が固定的のものであるから、これを相續させる子が必要である。子がなければ養子を貰ふのであるが、そんなわけで、自然と一夫多婦といふ事が公認せられて、道德上別に悪い事としなくなるのである、今日西洋では東洋人が妻の外に妾を持つことを非常に悪い様に言ふけれども、それは前言ふ通り正鵠を得た論ではない、現に支那などは甚だ盛んなもので、袁なども七八人居たし、蒙古王などは百七十何人といふ多数の妾を持つてゐるのである、これ等のことを聞いたら彼等は果して何といつて驚くであらうか、實にその土地固有の風俗習慣と、従つて生活上の差異を知らずして、是を評するのは寧ろ無謀である。

多妻主義

以上は東洋と西洋との、生活上の相異を説いたのであるが此の生活上の相異は、實に今日の如く、住居の上にも衣服の上にも顯はれて來たのである。

四 都會と田舎

吾等の生活は都會と田舎とによりても甚だしく其の趣を異にして居る田舎の人は自ら米を作つて飯を焚くけれ共、都會の人は一々米屋より買つて來て食ふ、衣服は前者は多く自ら織つて所謂手織木綿を纏ふけれ共、後者は全く呉服屋の店より求むる、住居も中流以上の人に非ざる限り都會人士の多は借家住ひをして居る、田舎にありては自己の家に住して、自己の

都會生活
と田舎生活
の差異

田に耕し、自己の手によりて多く自己の被服を製作して居るけれ共、都會にありては食物も、住居も、衣服も、一切金によりて求むるのであるから、都會人士に取りて最も大切なるは金である。

都會の人には家屋も田地も執着的なるものではないから彼等は懷中に財貨を有しさへすれば安心して何處にも生活する、昨日東町に住みしと思へば今日は西町、明日は北町と云ふわけで、久しく住みなれし町なりと稱する者も二十年を過したるの土地は無く、況んや三代四代の間、同一の地上に住居せる者なぞは大都市の人々の内には見るべくも無い、曾つて都會生活の半面を「若夫婦」なる短篇小説に借りて描寫した。

* * * * *

慧星の軌道の様に何所から來て何處へ去つて仕舞ふやら、拋物線狀の運命に乗つて、チラと眼前にちら付いては再び何處とも無しに消えて行くのは都會の下層生活だ、茲に若夫婦があつて亭主は二十六、細君は二十二か三。二人の間に男の子二人あつて四歳に三歳、何處からだかは知らないが去年の暮に此の麻布新網町へ越して來た。

肅々と小雨の降る或日、細君は亭主に向つて

『妾は飴ん棒を三十本食へますヨ』

と云つた、亭主は

『三十本許何んだ、乃公なら五十本位平氣だ』

『だつて貴郎は男ですもの』

細君は男とは奈何ことでも出来る生物だと考へて居るらしい、更に細君は亭主に云ふ。

「飴ん棒を三十本も食べたいナ」と下品な事を下品な口調で云ふ。

「勝手に買つて来て食ふサ」と亭主。

「ちや金銭を頂戴ナ」と細君。

「……………」斯う云ふ家庭の常として金銭の問題が會話の結論だ……………勿論、時々夫婦喧嘩もやるのだ、此の二週間程前から亭主は印絆纏を着ては、箱辨當を持って早朝から出て行く。自分では「細君の實兄が家を普請して居るのを手傳ひに行くんで、自分は土方ちや無い」と云つて居る。夫れは左様かも知れぬ。而して晩方歸つて来ては、其の實兄なる者を「兄さん

飴ん棒の
食ひ比べ

胃は何處
に在るか

が……………兄さんが……………」と何に付けても二言目には「兄さんが……………」と、専ら感服仕つて居る。思ふに所謂兄さんに對しては徹頭徹尾、頭が上らぬ何等かの理由があることであらう。

更に不思議なのは常識や教育の點に於て細君の方が亭主より數等勝つて居る事だ、或日、亭主が

「今日は腹が痛いから兄さん所は休まう……………」と云ふ

「大方、胃が悪いでせう」と細君

「胃つて何處にあるんだナ」と

「腸の上にあるんサネ」と

斯程迄、懸隔のある男女が奈何して夫婦になつたのだらう。四つになる子

は只無意味に「馬鹿！馬鹿！」と云つて居る、是れが此子の日課だ、往來を見ては此日課をやる、勝手口をのぞいては此日課をやる、母を見てはやる、菓子を呉れぬとてはやる、氣に入らぬとてはやる。

二月程前に此の家へ間借をして來た慈惠醫院の學生があるが、越すや否や、此の馬鹿を浴せかけられたので喫驚して

「お前より馬鹿な者は外には無いよ」

と云つてやるのであつた。學生は夫婦の者の直隣室に居を構へた、或る日曜日の午後、此の若夫婦の身の上を考へつゝ、獨り想に耽つて居た、すると四つになる子は、親父に向つて日課を初めた。

「馬鹿！馬鹿！」と、親父は乃ち

貸間に居る學生

悲惨な響

「親父は馬鹿だが、お前は利口になれよ」

只さへ凋落した様な、細君にさへ二三目置いてる様な此の亭主が、自分の子供にまで斯う云つた此の言葉が、如何にも悲惨に響いたので、學生は暫しケロリとするのであつた。其の内に三つの子は泣き出した、學生は、細君に似た顔だと考へた、細君に負さつて障子を破る、此の家の障子は下から三尺位の所までは通して紙が張つて無い。

「何故貼らないんです？」と學生が問うと

「子供が破いて仕舞つたんですヨ」と細君

「子供は障子を破る爲に生れて來たんだ……」と學生が云つたら、細君は寂しく笑つた。而して「此の方が是れからは涼しくつて却つて良うござ

んす」と負け惜みのであつた。三つの子は今日は細君に負ぶさつて脊が高く
なつたので、三尺以上の所まで手が届く、一生懸命に障子破りを初めた、
すると四つの子が飛んで来て「とッ」とッ」と唾を吐く、細君が叱る「馬鹿
！」と答へて又「とッ」とやる。

「本統に愛憎の盡きた子だ」と學生はしみ／＼思つた、臆がて學生の部屋
まで突入して来た。睨み付けたら「馬鹿！」と云つて退却して仕舞つた。

或夜、奈何した機會か鐵瓶を轉覆して湯が三つの子の足に掛つた、細君
は血眼になつてリスリンを塗り付ける、亭主は火鉢に寄り掛つて茫然見て
居る、細君堪り兼ねて

「何をしてゐるんです、良い年をして、子供が火傷したちやありませんか」

愛憎の盡
きた子

床の中で
議論

然し亭主は相變らず茫然して居る、何か考へ事をして居るのか、只、無意
識に斯うして居るのか、一體其の肉身に血液が流れて居るのか奈何か、暫
らく擾雜して居たが、聽て寝た、肉身は寝ても論議は寝ない。床の内盛
に花を咲かせてる。

「醫者へ伴れて行きませうか？」

「……………」

子供は足が痛いので盛に泣く、奈何すかしても泣き止まぬ。

「那様に痛いか知れやしない、醫者へ伴れて行つて來ませう」と、細君は
醫者へ行かんとせがみ、兒供は痛いどて泣く、亭主の堪忍袋が破れた。

「八釜しい！」

生活の真相

110

「何が八釜しいんです、児供は泣くのは當然だ……」早やおろく聲だ、亭主も却々きかぬ。

「醫者へでも何處へでも勝手に連れて行け！」

「勝手にとは何んです、二人で拵さへた児供を二人で心配しないで奈何します」と云つて、更に

「お前の様に一人ぼつちの人間ぢやなし、親もあり兄弟もあり……」と細君が云ふ。

亭主は風雲の愈々急なるを見て取つたのか、沈痛な聲で

「お前はなにを云ふんだへ、今更左様事を云ふ筈ぢやなかつた……」が」ときめ付けた。

此一言が如何に力あるのか、八釜しき細君の論法と擾々した児供の泣聲ががたりと止んだ、何だか謎の様な幕だ、翌日は頗る快晴で薰風がそよそよと来る心地がよい天氣であつた、夫婦は二人の子供を伴れ盛装して何處ぞへ出て行く、衝突のあつた翌日は大抵斯うなのだ。學生は「芝居へですか」と聞けば「淺草の觀音様へ參詣に」と云ふ、「公園で遊んで時間があつたら次手の參詣でせう」とからかへば、妻君は眞面目に斯う云つた。

「妾達は、毎月一度は屹度觀音様へ參詣することに定めて居ります、一月でも缺くと氣持が悪い、今日も只だ御禮参りだけして、公園は廻らずに歸るんです……」と、學生は此の一語に「成る程」と云つた様な顔付をしてだまつて仕舞つた。

若夫婦の
行衛

悟りの道

三〇八

一昨日、其の家の前を通ると、貸家の札が貼つてあつた、其の表通には近所の子供が飛行機を投げて遊んで居た、若夫婦は何處へ行つて仕舞つたやら……。(了)

出奔上京
者

大都市に於ける生活難は今に初めぬ事であるが、田舎も亦、漸々として生活難が襲ひつゝある、所謂文明の利器は益々發明されて人は日一日と贅澤になるのに、生産力は消費の割合に増加しない、絹張の洋傘を持つ事も覺えた、人力車に乗ることも知つた、斯くして虚榮の夢は農民の上をも襲うに至つた、東京中央停車場にては、犯罪に關係なき出奔上京者を月三十餘名發見すると云うでは無いか、是等の出奔者は何れも都會憧憬の

虚榮心に囚はれて居るのである。

今は正に都會も田舎もおしなべて生活上の一大改革の行はれねばならぬ時機となつて居る。

五 漂泊者 (一)

大都市と田舎との別なく生活難は多くの漂泊者を出すに至つたのであるが次の手紙は友人某の兄なる人、或る事情よりして親譲りの産を失ひ、遂に郷里に居るに堪えず、人目を忍びて生れし土地を脱出し、遙かに移住民として北海道まで落ち延び行きけるが、着きて直ちに弟なる予の友人が、是れも故郷離れて東京に住めるに當て、送れる道中の事やら、渡道後の事

北海道へ
行く人

生活の真相

三〇九

なご誌せし手紙である、漂泊者の一面を知るに足るであらう。

移住民

前略、過日端書にて一寸申上げ置き候ひしが如く、私共四人（著者曰く、本人と妻と子供二人）と外に隣村なる寺坂の友人夫婦の二人とを合せて六人、去る七日の午前二時半、愈々住み馴れし故郷の空を打ち捨て、〇〇驛より發する汽車に乗り、樺太行き移住民として落ち延び申し候、〇〇市にて一休し、夫れより午前五時半、其處より兎も角も北海道小樽驛までの切符を買ひ求めて乗直致し候、此の賃金は私共四人分と手荷物十貫目以内の運賃とにて、計金十圓十五錢、〇〇驛を通過したるは二時間の後なる七時半、兼ねて謀し合せおきたる爲め〇〇家の者は皆々して驛頭まで見送りせ

青森に着す

んとて出で居られ、金十一圓と、御守札様と、餅と、焼餅と、薩摩芋と、握飯との様なもの澤山下され申候、此驛にては僅かに五分間の停車時間にて、汽車は發したれば、是にて互に別れと相成りし次第に御座候。〇〇時のトンネル破損致し候ため、〇〇驛にて二時間ばかり停車仕り、夫れより途中無事、上州なる前橋市にて七日の夜を一泊す、八日の晩は福島市にて一泊し、九日の晩は盛岡市にて一泊致し候、斯くて十日の晝十二時過ぐる頃漸く青森市に無事到着いたし申し候、青森停車場の前に當りて「樺太及び北海道行移住民取扱事務所」なるもの有り、茲にては萬事を親切に取り扱ひ呉る、由にて候、私等は此處の停車場にて五時間以上を休み居りて、午後六時の函館行汽船に打ち乗り申候、乗り出せし折には晴天心地よ

かりしも、約三十湮ほど陸を去りし頃より暴風暴雨すさまじく相成り、船長よりは

船長よりの宣言

「青森港を發船せし際には晴れて居たりし故、四時間にして北海道へ上陸なし得る豫定なりしに、急に天候一變この様なる事になりしを以て今更如何とも致し方なし、此處に投錨して風雨の晴るゝ迄休泊する事に決定したり」

と云ふ通告ありしかば、一同の船客は一方ならざる心配を初め申候、投錨休泊約四時間にして、船は又もや進行を初め、北海道函館區へ私等の上陸したるは正に十一日の午前六時頃なりき、此の乗船は彼れ此れ十一二時間乗客は六百五十人程に候ひしが、其の八分ごほりは船に酔ひ私共の一行六

小樽へ着す

人中にても、何事も無かりしは子供の道恵と自分とのみなりき、されば船員は一人一箇づの金盃と藥品とを一同に配布いたし候も、道恵と自分のみには是等の配布品の必要もなく、一行の者等の看護なごいたし居たるやうの次第に候、斯かる折なれば〇〇にて、與へ呉れたる御守護札様や荷物纏めの時に持ち來たりし我が家の本尊佛や、先祖代々の位牌など取り出で拜み居り申候、されど上陸の際には妻お花も、子供俊子も、連行の夫婦も殆んど達者に相成り申し候、上陸後三十分を待ちて六時半の列車にて函館を出發し、約十二時間程にして小樽停車場に安着、停車場前の旅宿にて北海道の第一夜を過ごすことに相成り申し候、翌れば十二日、秋の朝日の輝くを待ちて、早朝起き出で、移住民役所へ出張いたし、夫れく手續

を了して、更に小樽驛通運會社に至りて、荷物を受け取らんとしたるに手荷物の方は既に着し居たりしも、大荷物の方は三箇とも未だ會社へ着し居らざりき、詮方なくて此處に休泊いたし居候處、移住民取扱所のお役人の云はるゝには

「今頃より、而かも大勢にて樺太へ行くことは、不可能であるから、今の内に自分一人にて行きて地面の具合や、土地の状態などを能く調べ置き、尙ほ樺太の役所へも願ひおきて、來年の四月初め頃から一同して行くゝ方が良いであらう」

なぞと親切なる御周旋に接し候、其の上、役人より北海道に住居する上に付いての交際上のこと、氣候風土に關する注意、其の他の事情など詳しく

樺太行の不可

店賃三圓

聞き取り萬般の便宜を得申し候、よりて暫時樺太行きを中止し、此の小樽町に住居を決定する事と致し、表記の場所を新なる吾が家と定め申候、一ヶ月の店賃は三圓、間口は二間半にして奥行は四間、道路に面したる狭くするしき家なれども、漂泊の身には先づ以て、止むなきこと、是れより此の家にて運命開展に努力仕る可く候、大荷物は未だ到着せざるを以て、夜具や家具などは一低大屋様より借用致居候。小樽の繁華なることは北海道第一と稱せられ居れど、或は京都や大阪も是には及ばざるやの感これあり候、明日より業務に着手する考に候が、私等の借家は電氣がありて夜業も出来る可く候、此の小樽に止まり居りては澤山の金は残るまじけれど、一ヶ年に五十圓や六十圓位は普通に暮し居り候ても残し得るならんと

悟りの道 三二六

存じ候、氣候も故郷の方と大差なかるべくと考へられ候、私も十三年か十五年の後は金を残して本國へ歸へる考なれば、目下種々と感考中に御座候、我々一同は頗る壯健に相成り申し候、俊子の病氣も神佛の御蔭にや日毎に癒りつゝあり、道惠も達者にて氣まめなるには、私も實に嬉しく思ひ居り候、此の地にて澤山の貸家を所有し、質店、借金などなし居る念満家は、何れも十五年前に渡道したとか十七年前に渡道したとか、或は來た時には一文なしたつたとか申し居り候、主として越後人名古屋人が多き様に候、私共の國の人は誠に少數なる様子、只今の借家の所有者なる大家は越中人に候、私は生國を出でし時、南の家より十五圓、倉井より五圓、大屋より前記の如く停車場にて十一圓、夫れに自分の作りたる二十圓、合せて

金五十圓以上所持し居たりしが途中やら渡道後やらにて今は二十圓許りに相成り候、併し愈々明日より仕事をするとなれば何の心配も無かる可く候今日に到る迄旅館三宿、下宿三泊、船中に一夜、此の住居にて一晚といふ譯にて候、昨日以來、米、味噌、馬、鹽、蕪、ござ等買ひ入れて代金三圓ほど支拂ひ申し候、私共も是より儉約を主として金を貯へ、明後年四月には多少の額を持ちて私一人歸國し、父上の法要をなし母上様にも面會いたし度く考へ居り申し候、道惠も近々には學校へ出す考に候、當地には寺も三十ヶ寺ばかり是れあり、病院も近傍に澤山これあり候。人生の有爲轉變は夢かと思へば、全く幻の如くに御座候。今や異郷萬里の旅の空にありて、靜かに故郷を思へば茫々漠々として何とも云ひ知れぬ感のみ浮び出

三十五歳にて

で申候、而かも過ぎ來し自己の身の上うへに考へ至れば慚愧ざんきのことのみ多く候
 親の汗と油とよりなれる産を蕩盡たうじんして生れし地にも居るに堪えず、人目忍しの
 びて此の土地へ流れ來り、來年の春には更に樺太まで行くべき身、想は若わか
 に故里に向ひ居り申し候、我が三十五歳の秋は我が一生の轉改期てんかいきに御座候
 今を一生の革命期と存じ居り候、是より一切の方面に於いて過去を改め、
 我が後半生の運命を開拓仕るべく候、月日の經つのは早ければ、五年や
 七年は瞬またく間にして、我が四十歳の年も、前途遠くはあらず、夢々油斷ゆだんい
 たすまじく存居り候、少くとも四十五歳、即ち郷里脱出より十年目には、
 必ず一既往に復すべく、此は私の堅き決心に御座候、勤儉努力、奮闘力
 行、神佛の照覽せさせ給ふ所に住して、飽く迄成功致し度く考へ居り候し

十年目に

候、下略 (大正二年十月十五日、北海道にて)

田舎の實例

是れは田舎に於ける漂泊者の一例であるが、獨り田舎ばかりでは無い、
 都會に於ては更に多くの漂泊者を見るのである。

六 漂泊者 (二)

近代生活の生んだ一現象として多くの漂泊者を見るのであるが、理論を
 列ぶる事をやめて、茲に一つの事實を挙げやう、今では商賣をして居るが
 曾つては海軍々人として永らくの間海上生活をやつて居つた従兄のKに
 暫らくで此夏會つた、其時、色々な珍らしい話や、面白い話や、戦争の功

生活の真相

名談やを澤山聞いた、其中に私の従兄と同じ時に、海軍に這入つて、同じ時に海軍を出た知人のSと云ふ人の物哀れな悲惨な身の上話が、一番著者の興味をひき、又印象も深かつたで、私は今従兄から聞いた要點を記して見たい、そは、多少は吾等にとつて参考ともなり、教訓ともなるものがあるであらうと思ふからである。S氏は極く眞面目な、正直な、そして又頗ぶるの勤勉家であつた、で私の従兄達の仲間の中では一番上官の信用が篤く、又仲間達からも重寶がられて居たさうである、聞くところによれば海軍の軍人は、陸軍の軍人に比しては總ての點に於て優遇を受けてゐる爲めでもあるが、然し又板一枚の底が地獄だと云ふやうな昔からの觀念に囚はれて居ることや、又は人の見ない外國の港などを見て來て、どうしても

元は海軍
軍人

眞面目な
るS氏

思想なり世界なりが廣いと云ふやうな、色んな關係があるからして金遣ひも荒く生活も贅澤で、一般には貯蓄の念なども薄いさうである。ところがS氏は斯うした眞面目な人であつたからして「軍人を罷めても差問のないやうに」と云ふやうな心掛けから、月に幾らかと云ふ金をも貯へて居つたと云ふことである。

時は丁度日露戦争後で、社會の總べての事が新らしく創めねばならないと云ふやうな氣運に向つた時であつた、で私の従兄達も何邊かに新らしい道を求めたい、開きたいと云つたやうな暗々裡の自覺からして、永い海軍の生活を捨て、社會へ出て來たのも矢張此時であつた、勿論S氏も其中の一人であつたことは云ふ迄もない。S氏の郷里は農家であつたさうだ

農を止め

悟りの道

けれど、永いこと軍人生活をやつた彼には、最早其職業は適當なものは無かつた、でS氏も勤め人は一番良からうと云ふやうな處からして、東京に出て口を探がしたが直ぐと或る知人の紹介で、芝區の某銀行に這入ることが出来たのです、然るに斯うした真面目な人であつたからして、其處でも間も無く信用を得て次第に良い役にまで取り立て、貰ふやうになりました、で三年間ばかりも勤めて居る間に、又もや少からぬ貯への金が出来たのである。

多少の金が手許にあるやうになるとか、或は生活に餘裕を生じて來ると得て人の心は弛みを生じて、そこからして色んな魔がさしたり、誘惑が這

S氏にも
冤がさす

入つたりする、多少成功しかけた人の失敗するのは多くは此の爲めで、分けても軍人出や、役人上りなどの堅い真面目な人達ばかり易いやうである。S氏も此の例にもれなかつた。多少の小金も出来たし、何時迄下宿屋の二階に獨りであるのであるまい「今度は早く妻でも迎へて身を堅めなくては」と、自分でも心配し、又知人や友人なども心配し、世話して呉れる人などもあつた、然し世の中はさう都合よくばかりは行かんで、彼れや此れやと人撰みをして居る中に、或二三の人達が來て横濱の方に非常に甘い儲け口があると云うに誘はれた、然し初めの中には氣にもとめず、其場限りの返事をして居つたが、段々方々から手が廻つて、如何にもよい儲け口であるかのやうに見えて來て、S氏も偶と今一儲けをしてから、家内

生活の真相

悟りの道
三二四
など持つも遅くないし、且つ又何時迄こんな腰辨もやつて居られまいと云ふやうな氣を起して仕舞つた。そして遂には其手に乗つて銀行を罷いて横濱の方に引き移つた、そして早速其事業に掛つた、處が見ん事失敗して仕舞つたのである。

一體斯うした奇利を博しやうとするやうな人は、餘程機敏な、そして海山千年と云つたやうな其道の達者でなければ駄目ださうである、それも何時でも儲かると云ふのでは無くて、眞んに偶然からそんな甘い口にブツかる事もあるのださうだ、何して軍人生活などして居つた、社會の事情に暗い正直な人達になど出来た仕事でない、然し社會は慘酷なもので、今にも金が降つて來さうな甘い事を云うて、斯うした正直な人達をかけやう〜

として待つてゐるのである、矢張りS氏も此の人達の手に乗つたのであつた、そして金は勿論、衣類まですつかりと取り去られて、遂には全く路傍に捨てられて仕舞つたのである。S氏も悪夢から醒めたやうに、今更の如く驚いた、然し其時はもう遅かつた、が今更知人や、友人のもとには恥かしくて行けもせんのも居た下宿の二階に、僅かばかりの衣類や道具を金に代へて、暫らくよき勤め口もがなと心當りを探して居つた。

熱心と謹直とで評判の良かつたS氏も、一度、誘惑の魔の手に捕へられては、貯めた金札は一文なしにさせられて仕舞つた、最後には食ふにも困つた、衣類や道具を悉く賣り拂ひ、再度の發展方法を講じて、見やうと思

つたが一度去つた好機會は、最う再度と捉え得られるものではない、探せば探すほど、もがけばもがくほど、今では一時凌ぎに、如何な仕事でも人に頼み、自らも探がして居るのであつたが、それすら中々容易には見付かりさうもなかつた、で今日も、春とは云へまだ薄ら寒い三月初めの空を朝早くから心當りの三四軒を訪つねて見た戻り途に、疲れ切つた重い足をひきづりながら、力なく歩いて來たが、偶と淺草公園に這入つて、とある木蔭のベンチに殆ど失神した人のやうに腰をおろした、そして時々思ひ出したやうに、池にうつる華かな彼方の人込みを見やつては、深い／＼思ひに沈むのであつた。然し、幾ら考へても今更よい知慧も、よい分別も出やうはなかつた、只出るものとは力ない吐息のみであつた、と云つて今更

に誰をも恨むべきで無いから、やをら其處を立つて歸らうとした時、すぐ側きのベンチに休んで居た一人の身装の卑しくない五十近い人が、馴れ馴れしく言葉をかけて色んなことを聞くのであつた、初めの中は問はれても恥しくもあり、又知らぬ人でもあり、深くも話し得なかつたが、然し、大層親切氣のある人のやうに見うけられたもので、遂に今の難儀の様まで話して仕舞つたのである。

「それは、マア近頃氣の毒な話である」

と非常にS氏の身の上に同情した彼は、中々東京と云ふ處は幾らも職業などは落ちて居さうで、其實求め難い事などを話して「若し地方でもよいと云ふならば、私の知人で北海道の或る會社に居る人から、此間書記に適

當な人があつたら心配してくれんかと云ふことを言つて来たが、聞けば君などは最適任者だ、尤も手當は當分六十圓と云ふ話で、到着迄の旅費も送ると云ふことである、仕うです君、君が行つてもよいと云ふなら照會して見やう、勿論そこがいけなかつたとしても、一寸した口位は私が探してあげやう、そして下宿屋になんか居ては金ばかりかゝるから、五日十日のことだらうから私の家に移つてはどうだ、斯うした事まで世話してくれるのであつた。非常に親切な話で、地獄で佛に遇ふとは此の事だらう、S氏は嬉しなきに泣いて感謝した、そして歸途其の家で夕飯の馳走になつて、其翌日にはもう其家の二階に引越したのであつた。

地獄で佛

S氏が下宿屋を引拂つて、淺草に在る彼れの家に移つてから丁度一月ば

旅の空へ

かりたつた後の或る日のこと、漸やく向ふから旅費も届いたからとて、其晩の夜行で東京をあとに遠い旅の空へと立つことになつた、處が初め彼れの家を引越した時の話では、北海道の知人からの返事は一週間か、遅くとも十日位で来るであらうとの事であつたが、一月も來なかつた、そして毎日爲すこともなく彼れの二階にゴロ／＼して暮してゐたが、此の家の有様や、出入りする人達や、其の主人の言動やはS氏の眼からは實に不審に見えたのである。

七 漂泊者 (三)

「親切な人」と思つて頼つた淺草の人は、彼の眼からは實に不審な人とな

不審な人

つた、其の言ふことが前後矛盾して居る許りでなく、其處へ出入りする人々
 なぞの話が恁麼も不審しい、不審しく思つたとても今更致し方もない、一
 月あまり待つた結果、漸く北海道へ赴任することになつて、愈々今晚の夜
 行で、上野の停車場から出發することになつたのである。

永い間「職にあり付きたい」と願つて居つた彼の事であるから、愈
 愈任地へ行くとするれば、多少の歡喜も胸に起らぬではなかつた、併し乍ら
 此の歡喜は彼の不審によつて打ち消された、運命の穴は黙し乍ら人を待つ
 人は是を知らずと雖も是れに接する時には、自ら一種の不安を感じるもので
 あると云ふ、彼は何となしに不安が感ぜられて仕方がなかつた「あゝ今晚
 東京を去るのか、去つて北海道へ行くのか、北海道へ行つたら一旗上げる

六十圓と
 云聲のみ

事も出来やうかしら……」こんな考が起きる下からも、寂しい、切ない
 一種の悲哀が胸に浮んで来る、況してや親切な人と思ひ込んで居た主人が
 どうも彼れの腑に落ちないことのみ多い、然し職に渴えたS氏には、六十
 圓と云ふ金の聲のみが大で、是れを不思議に思つて質問するほどの餘裕は
 なかつた、愈々出立することになつて、一月の食料や、世話をした手数料
 や、汽車賃を差し引かれた時、向ふからは少なからぬ旅費が送られたと云
 ふにも係らず、残るところは少しもなかつた、そして不思議な事には幾ら
 幾らと云ふ話し丈で、金と云ふものゝ影も形もS氏には見せなかつた、そ
 して何處へ行くと云ふ切符も見せず、丁度荷物のやうに上野停車場から積
 み込まれたのである、是れでもまだS氏は眞底から怪しいとは思はなかつ

た。「人を世話するのであるから、如何に親切な人なればとて、全く無報酬では出来ない事であらう、初め自分が手数は勿論、食料などもとる人だとは思はなかつたのが、自分の思ひ違ひ聞き違ひであつたらう」斯う考へながら自らを慰めて、闇の中を北へと汽車に揺られつゝ走つたのである。斯うして六十圓と云ふ月給の有難さにあてられたS氏も目的地に達したと云はれて、汽車から薄暗い停車場に降りた時、初めて「サア罹つたな」と思つた、それは北海道と云へば少くとも三日はかゝる、斯う思うて居たのに五六時間で達したのであるから、如何に愚かな人間でも驚かぬものはないであらう。

然らば此處は何處であらう、聞くだに戦慄する足尾の地の底の世界であ

自ら解釋す

足尾の地の底へ

成り行きに任する

つた、嗚呼、S氏は遂に六〇圓の書記と云ふ好餌に釣られて、遂に工夫として連れられて来たのであつた、あはれ變り行く若者の境遇よ、奈何まで不思議な運命の手に左右されて行くのであらう、呆然自失、彼れはせん術さへ知らなかつた、導かるゝまゝに薄す暗い道を進んだ、もう成行きに任せるの外はない。

鬼のやうな人に、足尾銅山へと、丁度引きづられるやうに連れて行かる、S氏の行みは遅々たるものであつた。それも其の道理だ、曾ては新聞や、人の話などで、其の惨めな工夫達の生活を聞く事はあつたけれども、此の世に在り得可き事などは夢にも考へてゐなかつた、然るに其の恐る

鷹に睨ま
れた子雀

しき此の世ながらの、地獄のやうな地の底の世界へ、今現に自分が歩一歩近づきつゝあるのだと思つた時は全くたまらなくなつて、どうかして逃げたいと云ふ心を引き起さない譯には行かなかつた、そして幾度かソツト眼をあげて、先き行く人の隙きもがなと見るのであつた、けれども其の人には寸分の隙もなかつた、却つて自分の斯うした事を考へて居る事を氣ざられた後の恐ろしさを考へた時、我れ知らず戦慄とするのであつた、そして丁度鷹に睨まれた雀のやうに何うすることも出来ず、只だ其人のあとをついて行くより外はなかつた。

斯くして明るる日の午後には、もうS氏は向ふの親方の手に渡されて、飯場の二階にあつた、薄す汚ない煎餅蒲團にくるまつて、彼方の隅み、此

二年の月
日

方の隅みとごろくしてゐて、何れが顔だか、何れが蒲團だか分らないやうな黒い顔から眼だけ光からせて、意地悪さうに人を見て居る工夫達の仲間なかにに混せられた時、其の淺ましい光景に、我れ知らず涙ぐまるのであつた、そして翌日からはもう此の人達と一緒に、闇黒の世界へと、薄す暗い安全燈の光りを唯一の光明とも、たよりとも、命の綱ともして追ひやらるゝのであつた、何と云ふ淺ましい變りかたであらうか。

狂るほしきまでに悶えながらも、何うする事も出来ずに、何時か二年の月日は経つた。幾ら落魄したとは云へ、元は海軍の軍人であつた、で何處かに普通の工夫とは異つた優さしい、おとなしいところがあつた、分けてもS氏は字を能く書くのであつた、斯うした處が親方の眼にとまつて、他

の工夫達などは夢にも見る事の出来ない飯場の書記と云ふ大役にまで、二年の後に抜擢せられた、其時はS氏も今度は前よりも樂になるであらうと思つて喜んで居つた。此の社會に於ける工夫達の生活、それは誠に惨めなもので、迎も此の世の人達になどは夢にも想像の出来ないものである、成程工賃は可なりにとれる、然かしそれは皆工夫の親方とも云はれるやうな人達の腹を肥やすのみで、工夫達の手に入るところとは一文もない、で誰も行つた當座は皆逃げやうくとするんださうだが、然かし其の鑛山全體の工夫達を見守る仕掛けは、巧妙を盡したもので、迎も逃げ隠れは出来ない其の中には皆自棄を起して仕舞つて、全く手の付けられない純粹の工夫となつて仕舞ふのである。同様にS氏も隙あらば逃げやうと、一寸の

暇にも思はない事は無かつた、S氏だとして其餘り殘忍さに、時には自棄を起さないでも無かつた、けれ共もう一度社會の空氣を吸つて、元のやうな身分になつて見たいと云ふ念が強かつた爲めか、二年後の今日書記にまで抜擢されても、逃げやうと云ふ念は一時も失せなかつた、そして書記となつてからは、多少工夫よりもよい事であらうと、竊かに期待してゐたのであるが、金の無い事も、苦しい事も、工夫と少しも變りは無かつた、三年目の秋の或る大雨の降る晩の事であつた、風の音や雨の音が邪魔になつて何うしても寝付かれなかつたが、便所に起きて偶と暗い空を見上げた時にS氏は「今晚のやうな時に！」と思つた、そして其の儘ふらふと外へ出て仕舞つた。

出走

「一度弦をば離れた矢はもう二度と歸へるものではない」斯う氣付いた時 S氏はかけ出した、そうして只だ驅けた、西だか、東だか、道だか、山だか、雨が降るのか、闇だか、一切知らず、全く無我夢中で驅け出した、明け方近くであつたらう、全く身は綿のやうに疲れて、もう一步も歩けなくなつて、其處の木の根に丁度死人のやうに仆れて仕舞つた、木から落ちた雫の爲めに、偶と我に飯へつて上を見た時、晴れた空は木の間から見上げられて夜は全く明けはなれて居つた、S氏は今更のやうに驚いて邊を見廻したが、人らしい氣はいは少しも無かつた、其處は何處とも判らない山中であつた、臆がてS氏は起つて歩かうとしたが、身體は濡れて居る、腹は

漸く人里に出る

立ん坊姿

空いてゐる、全くもう歩けさうにも無かつた、併し愚圖々々して居る時ではないので、よろめく足を木の根にさへながら山を下つた、そして暫くの後、人里へ出た、里へ出るは出たが身にはうす汚ない着物を着けたばかりで、其他には何物も持たないS氏は、眞に憐れなものであつた。

偕て其の年も暮れて冬の空となつたが、と或る寒い北風の吹く日であつた、神田明神側に住んでゐる私の従兄のKは、所用の爲めに明神前の坂を下りつゝあつた時である、汚ない身装をした一人の立ん坊に眼をくれた時、「何處かに見覚えのある人だ」と思つた、そして暫く行き過ぎてから、「其れは海軍々人時代の友達であつたS氏である」と思ひ出した。私の従

矢張りS
氏だつた

八百屋へ
周旋する

兄も、其の友人が銀行へ出たと云ふ話を聞いてから後、暫らく會はなかつたとは云へ、餘りの身の變り方に驚いて、逆ても彼の實直な友だとは思へなかつたが「若しかS氏としたら何か是れには所理のある事であらう」斯う思つたので歸へりにも亦其の前を通つて見た、ところが矢張り友人のS氏であつたので、耻しがる彼れを無理に引き伴つて自分の家迄歸つた。

連れて歸つた私の從兄は、S氏の是迄の身の上話を聞いて、何とかしてやりたいとは思つたが、顧みれば自からの職業も未だ人を救ふ程には餘祐も無かつたので、本郷の去る町に住んで、商ひも中々手廣くやつて居る或る八百屋の事を思ひ出した、それは私の從兄の知つて居る人の中で、最も男氣のある人であつた、で其の主人に頼んで、氏を使つて貰ふことを話

仕度金を
渡さる

してやつた。それは八百屋物を積んだ車の後を押して行く仕事であつた、そして一度ゆけば幾らと云ふ賃金を貰ふ事であつた、斯うした仕事でも、當ても無く車の通るのを待つて居る立ちん坊よりは、S氏にとつては何んなに有り難い事であつたか知れない、それから暫らく経つた或る日に、再び其處の主人を見舞うて、其後のS氏の模様などを聞いた上に、今度は一人で荷物を届けるやうに使つて貰ふことにして、身装もあれでは非道からうと云ふので、其仕度金として幾らかの金を貰うてS氏に渡した、俗に貧すれば何と云ふが、境遇の變化は矢張り其の人の身迄も、心迄も變化させて仕舞ふものである、でS氏も此類を出ることは出来なかつた、それは彼れ程正直で、彼れ程物堅かつた、S氏が、此二三年此方全く人らしき食

も人らしき樂しみも夢にだに出来なかつた處に、今俄かに纏まつた幾らかと云ふ金が、私の從兄によつて主人から貰ふことが出来たものだから、今迄抑へられてゐた人間としての欲望が、一時に力強くなつて来て、遂に我れ知らず足は其儘淺草邊に向つて、其處らの名も知れぬ處で、酒と女とに取られて仕舞つた、そして相も變らず車の後を押す立ん坊として送らねばならなかつた。

暫らくしてから私の從兄は、此の話を主人から聞いたが、其處の主人に申譯けが無いと云ふやうな事は別として、救はうとしても、一度社會のどん底にまで落ちた人は、中々救ひ出されないものであると云ふことを知つて、心から憐れなS氏の爲に泣いた、此の話を從兄から聞いた著者も亦薄

さても救へぬか

社會の罪か、人の罪か

命なる青年漂泊者の爲に泣いたのである、此の様なる漂泊者を出したの果して社會の罪であらうか、人の罪であらうか。

現代生活の不安は此の様な漂泊者を出しつゝあるのであるが、是れには社會にも罪があり、個人にも罪があらうと思ふ、吾等は先づ社會の改善を計り、而して又個人の向上を計らねば、此の不安なる近代生活を矯正する事が出来ないと思ふ。

八 社會の改善

近代人の生活は不徹底なる矛盾の上に基礎を置いて居る、社會の實狀を見るに、何處から何處までも不徹底である、此の不徹底は矛盾を生じ、矛

近代人の不安

悟りの道

三四四

盾は不安を生んで、現代人の生活は實に危険な状態に陥つて居る、試に見よ、現代社會の事を考ふれば、何から何迄矛盾の事ばかりの様に思はれるではないか、云ひ換へて見れば不調和な事ばかりの様に思はれるのである、これは今日の如き過度時代には免がるべからざる事であらうが、先づ其の例を擧げて見るに教育と法律との不調和、或は一般の人間は凡て西洋風思想になつて居る、即ち凡ての事に向つて權利義務の事計り考へる様になつて居る、法律等も西洋の法律を斟酌して制定したものであるから、やはり權利義務的の事計りである、然るに従來日本の國民道德と云ふものは教育勅語にも表はれて居る通り忠孝の二つが根本になつて居る、それで教育に於ても國民道德の邊に於ても、勅語を根本としてその精神を布衍して

教育と法の調和

権利主義と義務

居るのである、然るに權利義務的の法律思想では眞實の忠孝と云ふ事が出来るわけの者ではない、忠孝と云ふものは自分の心の誠が君に對し、親に向つて發したもので、たとひ自分の生命がなく成つても、たとひ自分の財産がなくなつても、親の爲め君の爲に、そんなことを考へる餘裕なく、何事も犠牲にして仕なければ居られないと云ふのが眞の忠孝と云ふものである、權利なぞと云ふ事を考へて居ては、到底出来るものでない、それは平日無事の時ならば「斯うくするのが親たり君たるもの、權利であり、斯くあるのが子たり臣たるもの、義務である」と云ふ様なことを云つて居ても通つて行くが、一朝ことある時、君が君たる義務を果さず、親が親としての義務を果さなかつた場合に於ては、子たり臣たるものは最早義務を果た

生活の真相

三四五

す必要がない事になつて、忠孝の實が茲に滅びて仕舞ふ、是れを咎める時は法律に訴へたとて、法律は矢張り權利義務から成り立つて居るものであるから何にもならない、此の様な矛盾が現代社會に行はれて居るから、是れを改善せすんば、近代人の不安を取り去る事が出来ない。

斯う云ふ風に國民一般の頭にある思想と、今日教育の上にて獎勵して居る忠孝の道徳とは調和して居ない、丁度圓いものに四角な蓋をするやうな形である。

今日國民道徳不振の聲が到る處に聞えるのも當然であらうと思ふ、こんな有様では國民道徳が振ふ筈がない、將來に於いても今日のまゝに放任しておいては國民思想の發達する理由がない、日を経る毎に益々振はなくな

るだらうと思はれる、是れに就いては宗教家、政事家、教育家等が等しく頭を悩まして居るのであるが、まだ其の不調和、矛盾を取り去るべき名案を聞かない、不祥な事ではあるが、是れを過激な言葉に代へて云つて見ると精神界の方では日本は今迄歐米各國から大兵を以て襲はれつゝあつたのである、そして敗北に敗北を重ね、益々その領分を蠶食せられて居たのである、日本人殊に青年の思想は歐米の思想に囚はれ、蠶食せられ、冒されて居た然るに冒す方の歐米の勢力は非常なものである、斯う考へて見れば實に寒心に堪えない、國民精神上の重大問題である、此の思想界の問題は國民の生活上に及ぼして、生活の不徹底となり、矛盾となつた。

右は唯だ國民一般の思想と國民教育との不調和の一端を示したに過ぎない

いが、その他の方面に於ても殆んど矛盾、不調和な事計りである、これは
 常に世間の事柄のみに限らず、自分々の精神上に就いてよく考へて見る
 と、驚き入る計りの矛盾がある、これは何れの上にもあることであらうと
 思はれるが、吾等の知識の側から考へて見ると、世の中は日に日に變つて
 行く、これは日本ばかりでなく、支那には先年來大革命があつた、是れは
 支那人民の頭の中の變化から起つたのである、東洋計りでなく、歐洲に於
 ても、殊に最も秩序ある國と稱せられて居て、この國に限りては社會主義
 なぞの起り様はあるまいと迄思はれて居た英國に於ても、先年大きな同盟
 罷工が起つて、上から下まで是が爲に頭を悩ましたと云ふ始末、其の他英
 國婦人の上にも變化が起り、所謂婦人參政運動となり、警官に抵抗して官

衙の硝子を打ちくだき、宰相迄が婦人の爲に虜にされて、困つた様なこと
 もある、社會の不秩序も極まれりである、是で奈何して健全なる思想の振
 興が見られやうぞ。

そんなことを考へて見ると、何に付けてもこれ迄の様な考へでは到底不
 可ない、是非共大なる變化に應じて行く頭が要る、政事に於ても、宗教に
 於ても、又、教育に於ても其他萬事に於て今迄の考では駄目である、今後
 世運に乗じて發展して行くには、更に大規模の考が要る。是れを一軒の家
 に付いて見ても、親子夫婦兄弟が手近い所に住んで居て、節句だとか、御
 祭だとかには一處に會して歡を盡す、又、祖先傳來の家や田地を堅く守つ
 て子々孫々に傳へて行くと云ふ様なことは到底これから出来ない様な事に

なるかも知れない、是れからの日本人はドシ／＼外國に出稼ぎに行かねばならぬ、北亞米利加、南亞米利加、オースタリア、支那の奥迄も働きに行かねばならぬ、今迄の様に親子兄弟夫婦が一里か二里離れた處に居て、時々寄り合ふと云ふ様な呑氣なことは出来ない、先祖傳來の田地を孫子の未だ傳へる事も出来ぬかも知れない、これから先のものは、そんな小さな事に屈託しては居られない、天地を以て我家とし、世界を股にかけて働くと云ふ意氣がなければならぬのである、現代社會の人に此の考が無いから生活の不安なぞが生じたのである、社會一般の氣風をして雄大ならしめねばならぬ。

天地を我家

前述の如きことはよく解つて居る、誰れでも知識の上では善く承知して

保守思想

居るのである、さうして居ながら小さな家を大切に守つて、親の残して行つた丈のものを何時迄も手離さずして是れを子孫に傳へて行かうとするやうな人は何んだか道德家の様に思はるゝし、生れ在所と親の家とを捨て、餘所へ行くと、何だか不道德の様に思はれる、知識の上では飽く迄も世の變化に應じて變らなければならぬと思ひながら、矢張り昔流の事をコンコンやつて居る人を見ると、何となくなつかしい様な氣がして、道德家の様に思はれ、少しでも突飛な事をやると不道德家のやうに思はるゝ、是れは個人／＼の頭の中の衝突であり、矛盾である、吾等は何處迄もこの矛盾を脱却する事に努力せねばならない、經國の志あるものは、此の根本問題に向つて社會の改善を計らねばなるまいと思ふ。

宗教の上にも矛盾不調和の事が多い、例へば或る一つの宗旨の制度の上
 に就いても、それが一般末寺の僧侶の頭と調和せぬ事が多い、それが爲度
 々紛擾が持ち上るのである、或る宗旨では制度の方が進んで門末の頭が是
 れに調和しない、或る宗旨では時代遅れの制度が門末の進んだ頭に調和し
 ない、何れにせよ此の不調和がある爲に攻撃が起り、紛擾が起るのである
 何れにしても、不調和を調和し、矛盾を取り去つて行かねばならぬのであ
 る、前に申したやうに國民の精神界が、一も權利、二も權利と云ふやうに
 なつて居るので、放任しておき乍ら忠孝の聲のみを高くして叫んで見た所
 で何にもならない、是れは何うしても此の不調和の原因を研究し、それを
 調和する方法を研究せねばならぬのである、要するに今日一般の我が國民

の生活、別して現時の青年の生活の根底たるべき思想をして親の恩や君の
 恩を感せしむるのが第一着である、眞に親を有難いと思ひ、君を有難いと
 思ふ心さへあらば、期せずして、忠孝の教は實現されるのである、權利義
 務の考では何うしても此の有難いと云ふ考は起り得ない、權利義務の教に
 由つて忠孝の實行を期するのは、砂を掘つて油を得やうとするに等しいの
 である。

吾等は茲に例を忠孝に取つたが、例へば忠孝の如き國民道徳の根本たる
 思想が、眞に現代人の心底に徹する事が出来たならば、其の他の徳目は自
 ら徹底するやうになるのである、偕て眞に萬徳が現代人に徹底するやうに
 ならば、其の社會は必ず進歩改善するのである、社會思想が改善せらるれ

ば、其の社會に生活するものは自ら大安心を得らるゝやうになりて、諸有
不満、不平、煩悶などは一掃せらるゝであらう、生活の根底は思想にある
社會思想の改善は直に生活の改善となるのではあるまいか。

九 個人の向上

次には個人の向上が必要である、現代人は物質生活の一面のみを見て心
的生活の存在を無するの傾がある、是れ生活不安の原因である、而して個
人の向上は實に心的生活の實現である、彼の修養といふ如きも實に個人の
向上を指したものである。

修養の意

個人の向上は悉しく云はゞ個人々格の向上である、個人の智見をして開

人格の向上

發せしめ、趣味をして豊富ならしめ、意志をして強固ならしめるのが人格
の向上である、吾等は爲政者とか、經國家とかに對しては社會の改善を慫
慂すると同時に、一般個人に向つては人格の向上を勸めざるを得ない、人
格を向上せしめて、世に處す、其の人身の胸中の平和なるは勿論、其の
人の周圍をしても平和ならしむる事が出来るのである、單に物質生活の改
善のみを絶叫しても、其の根底たる個人の向上を等閑にして居るやうな事
で、如何して生活問題の改善が計られやう、某友曾つて「處世哲學」と題し
て個人の向上を著者に書き送つた。多少、生活問題に觸れて居ると思ふの
で左に掲ぐる事とした、以て参考とするに足るであらうか。

X君！敢えて君に一篇を寄せるヨ、處世哲學つて言つても、今日は斷片的に書くのだ、心理學者の所謂自己表象の欲求は私だつてあるヨ、私の處世哲學を君に告げるのも此の欲求サ、で、主義の擴張以外に生活問題の方へも頭腦を使ふ者は、處世の事だけは他に一日の長ありサ、だから免じて以て傾聴して呉れ玉へ、私が今こんな事を曰へるのも、畢竟、生活問題に苦んだ御影で得られた人生觀なんだ。

傾聴！して呉れ玉へと私は曰つた。此の傾聴が處世の秘訣だヨ、君。是れが交際の武器サ、抑も社交の要は相手に快樂と幸福とを與ふるに在りだ、人は誰でも言つて見たい心がある、他人を捕へさへすれば直に話し掛ける、其が皆自分の愚痴だから堪らぬ、殊に女と來ては激烈だ、彼女は自

己萬能で、諸有問題を自分勝手に解釋して是非善惡の判斷を下し、其の結論を持つて來て君に安賣するんだ、殊に所謂過去に生きて記憶を命とする女の老人と來ては、堤の破裂した様に喋々と初める、殆んど反射的に、若し君が斯う云ふ女に出會したら、出來るだけ我慢して聽いて遣り玉へ、是れが寛大なる遣方で人間の美德だ、殊に相手が老人で話が経歴談なら、開を傾聴して遣るのは彼女に對しての君の義務だ。見玉へ、新聞記者、其他外交に當る者などが、訪問に出掛けた時に、主人に喋らせて置いて、自分では「成る程」「成る程」と時々投詞を發する許りなのを。彼は自己の話を君に聞いて貰つたのを如何に光榮に思ふだらうか、而して又、如何に彼は快樂を感じ幸福を得たりと思ふだらうか、所が、是に就いては必要な者が一

寛容の態度

つあるのだ。

寛容！即ち是だ、清濁兼呑主義になり玉へ、あの毛嫌ひと云ふのは不可
 大海の様な度量を養ひ玉へ、清流來るも濁流來るも、四河海に入つて本名
 なく、清濁吾に於いて何かあらん、清は用ひ濁は聞捨にする許りだ、世に
 處するには如何なる相手が來ても、兼呑して仕舞はぬと駄目だヨ、で無い
 と癢に障る事ばかりで遣り切れんサ、即ち清言たると濁語たるとを論せず
 面白くない話でも聞いて遣るんだ、で、愈々堪らぬ時は缺伸の一つ位はし
 ても良い、君が若し忙しい時だつたら、彼が「私等の若い時分に……」
 を初め出したら、程良い語切を捕えて「時に……」と躊躇せず、勇ましく
 此方の意見を初めるが良い、愚圖々々して居ると一日中きかされるヨ、精

幸福な人物

精で一時間か三十分、併し熱心（止む無くば顔付きだけでも）に傾聴し玉
 へ。此の寛容の美德は對話の場合のみで無い、到る處一舉手一投足、從晝
 至夜、常に表はし玉へ、所謂落付いた人とは是を指すんだ、快活で無く
 てはならぬが、夢にも輕卒な人間に成り玉ふナ。落付なき人間に成り下り
 玉ふナ。

閣下！賢い顧問官が贅澤な王様に告げた「閣下！閣下の領土に頗る幸福
 な男が一人ある、閣下若し其の男のシャツを着る事を得ば、閣下も亦、大
 なる幸福を得られやう」と、王即ち其の幸福な人物を求めに領土を巡廻
 した、そして到る處の富豪を問うて見た「お前に幸福な人物か？」「お前は
 奈何ちや？」「お前は？」と、然るに何れも皆、幸福ではない、不満だ、生

悟りの道 三六〇
活に對して失望をして居るのだ」との答、聽て片田舎へ來たが、茲で見すばらしい職人の様な男に遇つたから、例の「お前は幸福な人物か？」をやつて云ふ事に「時にお前は幸福なのか、夫れとも欲しいけれども未だ得られないと云ふ物があるのか」と「否！閣下、手前は全く満足して居ますので、へエ」と。王は「御前の言は非常に幸福だと云ふ意味か？」と、「ハイいかにも——全く幸福でして……」王は驚いた、斯んな男が幸福な人物なのかと思つたので、愈々自分も大なる幸福を得る時機が來たわいと思つて、王が曰つた「お前のシャツを脱げ、そして俺に呉れい」と。「それは大變に光榮の至りに存じますが」と此の善良なる職人が答へて「併し閣下！是れを上げると着替は無いのです」と附け加へた「成る程、幸福は富豪の

間に存する事なれで、一枚のシャツ外持たぬ低い卑しい煙ぶつてる人間の裡に在るんだつたか」と、夫より王は精神生活の妙趣を知つたので贅澤な欲望を起す事を止めて、知足安分の幸福な王に成つたどフランスの古い物語にある、君、世界の金持とは、事實澤山は持たないで而かも毎時も持つてる様な氣のする人の事だヨ、夕暮銀座通りを蹠躑いて行く泥醉爺の言にも大眞理と大哲理が在るヨ、聞いて見玉へ「ペラ棒！三井だつて此の甘い味は解んめい」と、人生の眞の幸福と愉快と安逸とは知足安分に在るのだ、貪慾は實に見悪い、欲深き人の心と降る雪は積るにつれて何とかなると云ふでは無いか、私の知つてる法學士に座布團を毎時も二枚かさねて敷いてる男があつて、來客に對しては一枚の布團も勸めると云ふ事はしない、偶

客に勧めても尻の下から引張り出して「敷き玉へ」とやる。御本人は慾のない正直な善い男だが、知らぬ人からは慾深に見えて見つとも良くない、慎しんだ方が良い。

柔和な情

柔和！友人を持つなら同情のある柔和な人を選び玉へ、君も友人に向つて柔和であれ、殊に婦人に對しては親切であれ、ジエントルであれ、併し同時にマンたる事を忘れ玉ふな、ジエントルにいてマンたる者は理想的の男子である、所謂騎士的なんだ。倒れた人を起して遣り玉へ、靴の塵まで拂つて遣る必要は無い、挨拶なども丁寧にし玉へ、そして莞爾し玉へ、私は未だ丁寧と莞爾の爲に威厳を損じた人を聞いた事がない、だがおべんちやら笑は斷じて爲す可らずだ、千々に咲く言葉の花も柔和なる心ぞ本の根

樂天主義

ざしであるんだ、人は心が第一だ、柔和なる心を第一にして、女は其上に容貌、男は其上に腕前、容貌と腕前とは人の成功を扶ける。併し柔和な心は君の爲に成功を獲得する、絶對的の美しい女と、卓越せる腕前(才能)の男、是等に若し優し味と懐かし味と、即ち柔和と同情とが無かつたならば女は一箇の無點眼像で、男は一箇の輪轉器だ、像は點眼して生きて來、輪轉器は技師を待つて初めて役に立つ。

樂天！夫れを以て上つ調子だと云ひ度いものは勝手に云へ、第一に自分が呑氣で良いでは無いか、くよくし玉ふな。愚痴は愚にして痴なる人間のする事だ、コップの中のミルクを過つて土の上へこぼして仕舞つても涙をこぼし玉ふな。愚痴をこぼしたり、土の上へ匍匐つて吸ひ込み玉ふな、

ベストを
盡せ

其の手に更に第二のミルクを購ふ方法を講じ玉へ、私の樂天主義はベ
 トを盡す主義だ、樂天と云つた時は過去に關し、ベストと云つた時は未
 來に關する、而して樂天とベストは續接して居て、其の間に隔りは無い、過
 去と未來の間に現在を設けぬのだ、君の家が焼けたとする、其の焼跡を見
 て涙を溢すに及ばぬ、是れ樂天主義だ、直に保険金を引き出して來て新し
 いのを建て玉へ、これベストを盡す主義だ、だつて是れより外に方法は
 無いではないか、樂天の一番有難いのは逆境の時だ、古來云ふ「逆境
 は人物を作る」と、豈敢逆境を啣つて寝て居たとて人物には成れまい、奮
 闘するんだ、私は經濟が下手なもので時々財囊が空乏になる、併し其の時
 は一生懸命に書いて本屋へ賣り付けるんだ、買手が無ければ又新に別の

修養の意
義

者を書く、何程でも書く、何程かいても駄目な時は二週間位湯にも入らぬ
 禁煙會々員に成るのも此時だ、お茶も呑まない、私は決して「困つたなア」
 と他人に相談かける様な事はせぬ、私は樂天をやる事が上手なんだ、所が
 君、注意して見玉へ、「困つたなア」と他人に話すと、相手は必ず「僕も困
 つた」と「貸せ」とも云はぬ内から「貸して呉れども云はれるんでは無
 いか」と心配して、お先廻りの豫防線を張るヨ、屹度だから注意して見玉
 へ。又實際困つた様な顔は餘り見場の良い者でもないからネ、兎に角、處
 世には弱味を見せるものは一番不得策だ、樂天に成つて見玉へ、那樣弱面
 は仕たくツても出來ツコ無い。

修養！能く人は曰ふ、「死んだ氣に成つて修養しろ」ッて、私には其の意

味が解らん、全體修養なんつて者が奈所にあるんだ？さう鹿爪らしく言ふから窮窟で堪まらんだ、君の往かん所、到らん所、皆修養してるんぢや無いか。お茶を呑むのも飯を喫ふのも、みな精神を撫育してるんだ。斯うしたら修養に反しはせぬか、奈様こと云つては悪いか知らん？」など思つてクヨクヨする連中は、皆修養てふ文字に囚はれた意氣地なしサ。私は君に曰ふ「世言に動かされるな」と、世の中の人は良い事は讃めては呉れないで、一寸でもまつい事があると大騒ぎをするんだ、だから毀譽褒貶は大抵ノンセンスなんだ、ノンセンスな批評に動揺される様では修養も何も在つた者ぢや無いヨ。批評は畢竟批評なんだ、決して人格を規準するクリテ

囚はるゝ
勿れ

要、而して修養の要は批評以上に超然たる度胸を作る事、即ち豪膽に成るに在るのだ、「是を學ぶは是を好むに如かず、是を好むは是を樂しむに如かず」で、甲是乙非に動かされぬ様に豪膽を把持して朝三暮四樂しみ玉へ。だが私は是に附け加へて曰ふ「君の成功は大に君の親友に負ふ所もあるが更に大に實に君の敵に負うて居る」と、敵の罵批罵評は君が成功する爲に造られた飛道具サ、だから敵でも愛するんだ。最後に曰ふ、修養のクリテ

信仰

信仰！新時代の新青年の處世哲學に於ける新信仰は、決して舊形の舊ド

悟りの道
三六八
グマでは無い、君も私も他人の信仰に關して兎や角いふまい、信仰は内部的の者で、不許外客入底の筈だから、自分の好きな甘い牡丹餅を以て直に他のワイン黨に押し着ける様な野暮はすまいヨ。曾つて涙を以て冷たき麵麩を割き乍ら、悲しき一夜を泣き明かした肺患の詩人ならば、或は暗中摸索して何者かにしがみつきもしやうが、御同様は去る贅澤な事を致す可く餘りに多忙だ、而して剛健だ、意志が強い、意地も在る、中々きかん氣だヨ。まア、今の儘で捨て、置いて貰はうヨ。だが私は此頃から毎朝三十分づつ必ず坐禪をするヨ、何の爲だか私にも解らない、只するんだ。
釋尊！それから道元禪師！私は此の兩大人格に向つて絶對に歸依して居る。ソノ舊形式の舊ドグマには私は勿論賛成しない點もあるが、大人格

の前には全く敬服せざるを得んネ、是に就いては君も御同感だらうと私は信ずる。私等はツマリ此の超人に對する大迷信家なんだ。私等は、イヤ私には他に牡丹餅を強い代りに、他にワインを押し着けもしない、甘黨と辛黨は自然に天地が違うんだからネ、併し「お主の修養は？」「信仰は？」と云つて問はるれば、是を大々的に發表して、左様いふ人に説明もして遣る、演説もして遣る、而して其の人の衷心に兩大人格に對する迷信を湧出せしめても遣る。开は前に謂つた自己表象の欲求なんだ。X君！賢明なる君には大抵私の意見も呑み込めたらう、實は私の「處世哲學」は君だけに告げただ。(了)

世路の難、山に非ず水に非ず、實に人生の航路である、此の航路に掉さず船人に取りて、生活問題は實に重大なる荷物である、此の荷物を負うて此の航路を行く人、自己の心中に確乎とした處が無くて奈うしやう、吾等は讀者と共に「處世哲學」の眞實味を掬りたいものである。

十 結論

以上は主として一個人としての生活に就て述べたのであるが、吾等は更に家族の一員としての生活も完全にやらねばならぬし、自治町村の一員として、立憲國民の一員として、世界文明國民の一員として、各その場合都合によりその完全なる生活を實現せしめねばならない、而して其の生活は

無能力生活とか、犯罪的生活とか、法律的生活とかでは、勿論満足する事が出来ない、少くとも道德的生活、更に進んで宗教的生活に入り悟りの道を歩まねばならぬ。

茲に宗教的生活に入ると云うても彼の一部の宗教家の如く自己一人の安心立命に満足して、紛叫せる世態を救濟せざるが如きは吾等の取るべき方法では無い、社會は共同の生活舞臺である、衣服は以て織女縫工の勞に俟つべく、食物は村女野翁の恩に依るべく、住居は匠人工者の力を借る、其の他生活上一切の必要物は何れも皆な他の恩人ありて吾等に是れを送る吾れ既に他の恩恵を受けて此處に斯く生活す、須らく其の恩恵に酬ゆる處なくてはならない、水戸烈公曰はすや

朝な夕なものくふ度におもふ哉

めぐまぬ民にめぐまるゝ身は

と、朝夕三度の食事にも絶大なる農夫の恩がある、此の恩の大なるをもの食ふ度に思はねばならぬ。而して此の大恩に報ゆるの道たゞ一あり、我が職業を大切に守りて吾もまた共同生活の一機關たる面目を現すこと。是れのみ、手を懐にして他の力になれるの食物を取り食ひ、足を勞せずして他の製作せる衣服を纏ひ住所に臥す、是れを社會の寄生蟲と云ふ、入りては自己の心内に宗教的安心を藏して達觀せる人生を送り、出でゝは自己の本業を勵みて社會に貢献す、是れ實に正しき生活の歸結ではあるまいか。福澤諭吉翁人を警めて曰く

社會の寄生蟲

自己の大安

孤獨主義

「一家より數家、次第に相集りて社會の組織を成す、健全なる社會の基は、一人一家の獨立自尊にありと知るべし」

と、一人一家の獨立自尊ありて初めて社會組織の健全なるを見る、吾等は社會に貢献して、自己の社會的義務を果さんとするの前、先づ自己の一大安心を獲得せねばならない、併し乍ら自己の一大安心を得んとするに急に於て、孤獨主義に流るゝ時は健全なる社會的組織を見ることの出來ざるは猶ほギョーが

「大凡そ何れの地たるに論なく、孤獨主義大に行はれて人々たゞ自己の事のみを圖り、其の思想自己の外に及ばざる時は、其の社會は殆んど成立すること能はず」

生活の真相

と云うた如くである、自己を全うして社会全く、社会全うして自己また全きを得るので、社会を離れし自己なく、自己をおいて亦社会を求むべくも無い、されば福澤翁は更に

「社会共存の道は、人々権利を守り、幸福を求むると同時に、他人の権利を尊重して、苟くも犯すこと無く、以て自他の獨立自尊を傷つけざるに在り」

と云うた、吾等は自己の権利を尙ぶと同時に他人の権利を重んじ、他の職業者の恩に浴すると同時に、自己の職を守りて他に恩恵を施し、自ら安心を得る如くに他人をしても安心を得せしめ、自ら生活上の平和を得るが如くに他人にも平和を感せしむるの大度量が無くてはならぬ。

他と共に

生活より
活動へ

吾に山をも抜くの氣概あり、吾に時勢を洞観するの知見あり、吾に社会衆人と樂しむの性情あり、而して是が根底には確乎不拔の信念あり、此の信念を根底としてなりはひいさんが爲の職業を取る、生活難の叫聲社会の全面に渡るとも何かあらん、吾等は只だ此の覺悟を以て紛雜せる此の人生に處せんのみ、生活問題また何の顧慮する處ぞや、生活の問題に恐畏する所なく三昧になりて活動する事こそ實に處世の秘術、悟りの道である、請ふ、活動の三昧を述べしめよ。

第五章 活動の三昧

一 活動とは何か

何人も竟に死す

「人間は何の爲に働くのか」と問はゞ恐らく「食はんが爲に」と答ふるであらう、「然らば何の爲に食うか」と問はゞ「死せざらんが爲に」と答ふるならん、して見ると人間が活くのは畢竟、死せざらんが爲に働くのである。それでは活けば果して死なゝいかと云ふに、活くも死し、働かざるも死す。死は如何なる人も免るゝ事の出来ないものであるから、活動を以て食物を得るの手段となし、食物を取るを以て死せざらんが爲の手段となす如きはならぬ。

活動は自己目的

は、頗る淺薄の考と云はざるを得ぬ、活動は活動夫れ自身が目的であつて、決して他の手段では無い、吾等は活動のために活動するの覺悟が無くしてはならぬ。

活動の字義

然らば活動とは如何なる事か、活動とは英語の Vitality 或は Activity と同じ意味で、いきゝとして働く事である、「彼は活動主義である」とは如何なる場合にも、萎縮するやうの事なく、常にいきゝとして立ち働くのを云うた言葉で、努力とか、奮勵とか、勤勉とかいふ事も、此の活動の多少具象化したものである、ル・ク・リ・シ・ア・スは

「活動は活動自身に於て愉快なり」

と云うたが、吾等は只だ活動しさへすれば自ら愉快に成るのである、夫れ

故、活動するに當りては他の事を顧みるの必要がないのである。

併し乍ら其の活動をなすに當りては、めく蛇式の活動では不可ぬ、練磨せられたる知慮を根底とし、菩提心より出で來りし活動でなくてはならぬ般若智を根底とし、菩提心を動機として自由自在の活動をしてこそ、其の活動に價値があるのである、釋尊は實に此の意味の活動の權化であつた南教北説、衆生濟度の爲に一日として席温まるの日なかりし其の一生は實に活動其物であつたでは無いか。

併し乍ら活動とは心のそはくして毎日も落着なく、常に何となく忙しげな事を云ふのでは無い、熊澤蕃山は「小人は心利害に落ち入りて暗味なり、世事に出入して何となく忙し」と云うたが何となく忙しいのでは決して

て活動では無い、眞に心底に平穩を有せる般若の智性より出でたる活動こそ、人間として大切な徳である、或る僧が智門和尚に向つて般若の智性に關する質問をした事がある、即ち

「如何なるか是れ般若の體？」

智門の曰く

「蚌、明月を含む」

更に問ふ

「如何なるか是れ般若の用？」

智門の曰く

「兔子、懷胎す」

と云うのである、一體般若とは何の事か、般若に三義あり、實相般若、觀照般若、文字般若である。實相般若といふのは、般若の本體、堅實牢強にして破壊すべからざるもの、即ち人々本有の心體、活動の根底たるものを指すのである、觀照般若とは般若の活用、銳利俊疎にして一切の迷闇を照し、一切の真相を了知する智慧の光明、無明黑暗を照破する大明燈の活動である、文字般若とは大解脱地に到らしむる處の一切の語義、一切の詞章、一切の標月指である。

今、一僧の「如何なるか是れ般若の體」と問うたのは實相般若を云うた者と思へば間違ない、般若 (Pragna) は梵語、此に智慧と云ふ、即ち吾等の智性を指したのであるが、吾等の智性の本體は抑も何物ぞやとの質問

答へて「蚌、明月を含む」と云うた、即ち譬を借りて答へたので、般若の本體の普編なるは尙ほ中秋の明月、光り沙界に遍く、行き渉らざる處なきが故に、彼の一介の蚌にも及びて、彼さへも般若智性の明月の光を含むので、荻蘆葉上團々たる露、光彩燦然として月華を含むといふ具合、(傳説に曰く、蚌中に明珠あり、中秋明月出づるに當りて、蚌水面に浮び出て、口を開き、月光を含めば、感じて球を産すと)

僧更に「如何なるか是れ般若の用」とて、前問は實相般若の本體を問ひ此には觀照般若の妙用活動を問うた、すると「兔の子が懐胎んだ」との返答、是れまた事を借りて、恒河沙界に周遍せる底の般若の光明活動を顯したのである、即ち兔子仲秋に至りて月光を呑み、懐胎するが如く、彼の